

宇都宮市埋蔵文化財調査報告 第19集

瓦塚古墳群・日満遺跡

—長岡ニュータウン建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

昭和60年3月

宇都宮市教育委員会

発刊にあたって

宇都宮市は、栃木県の県庁所在地として人口増加が著しく、これに比例して住宅地の造成が市内各所実施されております。

この宅地造成には、個人によるものから会社や公社・公團による大規模ないわゆる住宅団地と呼ばれるものがあります。

本市内に造成された住宅団地のうち、北部の豊郷地区の団地の多くは、低丘陵上に立地しています。

この低丘陵に位置する団地の一つに長岡ニュータウンがあります。

しかし、このニュータウン建設地内には著名な前方後円墳である瓦塚古墳をはじめ円墳数基の所在しているほか古代人の集落跡も含まれていることが予想されていました。

そこで、当教育委員会では、ニュータウン造成にあたってこれら埋蔵文化財の保護を重視する立場から長岡ニュータウン造成事業者と協議を重ね埋蔵文化財の取り扱いに対応しました。

その結果、瓦塚古墳群のうちニュータウン計画から除外できない3基の円墳と縄文時代の日満遺跡について発掘調査を実施し記録保存することになりました。

発掘調査は、昭和48年から55年にかけて3次にわたって実施されました。本報告書は、諸般の事情から刊行が遅れましたが、その調査の概要をまとめたものです。御活用いただければ幸いです。

なお、一部執筆にあたられた先生の都合等により、調査結果を全て記録しているといえませんが、不十分な点は後日報告されることになっております。

末文になりましたが、本発掘調査に携っていただいた諸先生方及び御協力いただいた大林不動産株式会社、更に本調査に関係した各位に対しまして厚くお礼申しあげます。

昭和60年3月

宇都宮市教育委員会

教育長 後藤一雄

序 文

宇都宮市域北半の一角を占める田川沿岸の低丘陵地帯は、県指定史跡の大塚古墳や長岡百穴古墳、市指定史跡の北山古墳群をはじめとする幾多の集落跡・古墳が群在するところとして著名である。この地域が遺跡の宝庫であるのは、起伏に富んだ低丘陵とそこを貫通する田川が、原始・古代の人々に山の幸と川の幸を豊富に供給したからである。悠久の昔の人々にとって最も理想的な自然環境であった。だから彼らは山林を伐採して其処彼処に集落を営み、農耕を主生業とした古墳時代人は、低丘陵縁辺に古代ムラを形成して、田川沿岸の低湿地と広々とした沖積地を農耕地に選定し、眺望のきく丘陵上に古墳を築造した。これが今に残る集落跡であり古墳群なのである。

これらの貴重な遺跡をわが歴史の如く見守りながら、地表上に露呈した遺物を一つ一つ丹念に採集しては、その出土地を記録し続け今日に至ったのが小堀時蔵氏である。地域住民に信望の厚い温厚篤実な小堀氏がこの地に住したため、出土遺物の多くは散逸することなく氏の収蔵庫に保管され、これを一見すれば旧豊郷村の原始・古代の姿を再現できるのは氏の大きな業績ということができよう。

市教委の方々や私たちが、長岡ニュータウン建設に伴う遺跡調査を実施するにあたり、先ずは小堀氏の指導・助言を得るために氏を訪ねたのは、効率ある発掘を望んだためである。

田川沿岸の丘陵上に散在する遺跡をすっかり手中に收めている氏を訪ねれば、寸分の無駄もなく調査が成就できると判断したからである。

こんなわけで、長岡ニュータウン建設に伴う発掘調査は円滑に進行し完了することができたが、その報告書作成には大変な歳月をかけてしまった。というのは、昭和50年前後の時期は大規模な発掘調査が相次ぎ、これに加えて県市町村史の編さん事業が活発に行われたため、発掘に従事した研究者の多くがこれらに関与し、身も世もない毎日を過ごす羽目になったからである。それにしても、私たちの我儘を黙視統け許容して今に至った大林不動産株式会社東京本社の諸氏に対し、私は衷心から陳謝申し上げ、本報告書刊行の序としたい。

昭和60年3月

宇都宮市文化財保護審議委員会

委員 墳 静 夫

例　　言

1. 本書は、宇都宮市長岡町、瓦谷町及び関堀町に立地する「長岡ニュータウン」の建設に伴う「瓦塚古墳群（市遺跡番号26）」及び「日満遺跡（市遺跡番号14）」の調査報告書である。
2. 本書は、塙 静夫、小堀時蔵、大金宣亮、山ノ井清人、屋代方子の各氏と宇都宮市教育委員会社会教育課で協議し作成したものである。
3. 本書の執筆者名は5の(4)に示すと共に文末に明記した。なお、編集は定岡が担当した。
4. 本調査に要した経費は全て大林不動産株式会社東京本社の負担によった。
5. 本調査の関係者は次のとおりである。—()内は当時のもの—

(1) 瓦塚32号墳〔昭和48年〕

調査担当者 川 原 由 典（栃木県教育委員会文化課調査員）

山ノ井 清 人(㊞)

調査員 小 堀 時 蔵（宇都宮市文化財調査員）

事務局 檜 原 貞 國（宇都宮市教育委員会社会教育課長）

南 雄次郎(㊞) 主任主事)

(2) 瓦塚25号・26号墳〔昭和50年〕

調査担当者 塙 静 夫（宇都宮市文化財保護審議委員会委員）

大 金 宣 亮（栃木県立郷土資料館主事）

調査員 小 堀 時 蔵（宇都宮市文化財調査員）

山 崎 由美子（作新学院高等部教諭）

事務局 檜 原 貞 國（宇都宮市教育委員会社会教育課長）

丸 山 秀 彦(㊞) 主任兼社会教育主事)

平 石 邦 昭(㊞) 主任主事)

松 沢 清一郎(㊞) 主事)

(3) 日満遺跡〔昭和55年〕

調査担当者 塙 静 夫（宇都宮市文化財保護審議委員会委員）

調査員 屋 代 方 子（宇都宮市立雀宮中学校教諭）

小 堀 時 蔵（宇都宮市文化財調査員）

事務局 半 田 昭（宇都宮市教育委員会社会教育課長）

河 越 昌 司(㊞) 文化振興係長)

定 岡 明 義(㊞) 主任主事)

木 村 光 男(㊞))

(4) 本報告書関係 [昭和59年]

企画 塙 静夫 (宇都宮市文化財保護審議委員会委員)

小堀 時蔵 ()

大金宣亮 (栃木県文化振興事業団調査第一課長)

山ノ井 清人 (作新学院高等部教諭)

屋代方子 (宇都宮市立雀宮中学校教諭)

事務局 加藤 悅男 (宇都宮市教育委員会社会教育課長)

小林錦一 () 文化振興係長)

定岡明義 () 指導主事)

手塚英男 () 主任主事)

梁木誠 ()

阿部信弘 ()

協力者 富祐次 (宇都宮市文化財保護審議委員会委員)

金田信夫 (聖山公園遺跡調査員)

執筆分担 塙 静夫 序文

小堀時蔵 I-1-(2)

大金宣亮 II-3, II-4, II-5-(1)・(2), II-6

山ノ井清人 II-1, II-2

屋代方子 III

小森哲也 II-5-(3)

定岡明義 例言, I-1-(1), I-2

なお、瓦塚古墳群古墳分布図(第4図)は、小堀時蔵氏の御指導により、昭和59年6月16日・現地調査(小堀・富・金田・定岡・手塚・梁木)を実施し梁木が作成した。

目 次

・発刊にあたって
・序 文

宇都宮市教育委員会教育長 後 藤 一 雄
宇都宮市文化財保護審議委員会委員 塙 静 夫

I 調査の概要

1 遺跡の概要	1
(1) 遺跡の環境	2
(2) 遺跡の性格	4
2 調査の経過	5

II 瓦塚古墳群

1 瓦塚古墳群の概要	6
2 瓦塚32号墳	8
(1)立地 (2)墳丘 (3)周溝 (4)土層 (5)内部主体 (6)掘り方 (7)出土遺物 (8)年代について	
3 瓦塚25号墳・26号墳の概要	17
4 瓦塚25号墳	18
(1)墳丘 (2)埋蔵施設	
5 瓦塚26号墳	22
(1)墳丘 (2)埋蔵施設 (3)出土遺物(副葬品)	
6 まとめ	29

III 日満遺跡

1はじめに	31
2日満遺跡の概要	33
3調査結果	33
4おわりに	40

IV 図版

挿 図 目 次

第1図 瓦塚古墳群・日満遺跡位置図	1
第2図 瓦塚古墳群・日満遺跡周辺遺跡分布図	3
第3図 鈴剣(小畠作図)	4
第4図 瓦塚古墳群古墳分布図	7
第5図 瓦塚32号墳掘り方及び周溝全側図	10
第6図 瓦塚32号墳トレンチ内土層図	11
第7図 瓦塚32号墳石室実側図	13・14
第8図 瓦塚32号墳出土遺物	15
第9図 瓦塚25号墳・26号墳位置図	17
第10図 瓦塚25号墳丘実側図	18
第11図 瓦塚25号墳石室実側図	19・20
第12図 瓦塚26号墳丘実側図	22
第13図 瓦塚26号墳石室実側図	23・24
第14図 瓦塚26号墳出土遺物実側図(1)	27
第15図 瓦塚26号墳出土遺物実側図(2)	28
第16図 日満遺跡発堀調査地区図	31
第17図 日満遺跡遺構分布図	32
第18図 B区P-64土壤実側図	34
第19図 B区P-10土壤実側図	35
第20図 C区P-205土壤実側図	36
第21図 日満遺跡時期別遺構分布図(1)	38
第22図 日満遺跡時期別遺構分布図(2)	39

I 調査の概要

1 遺跡の概要



(1) 遺跡の環境

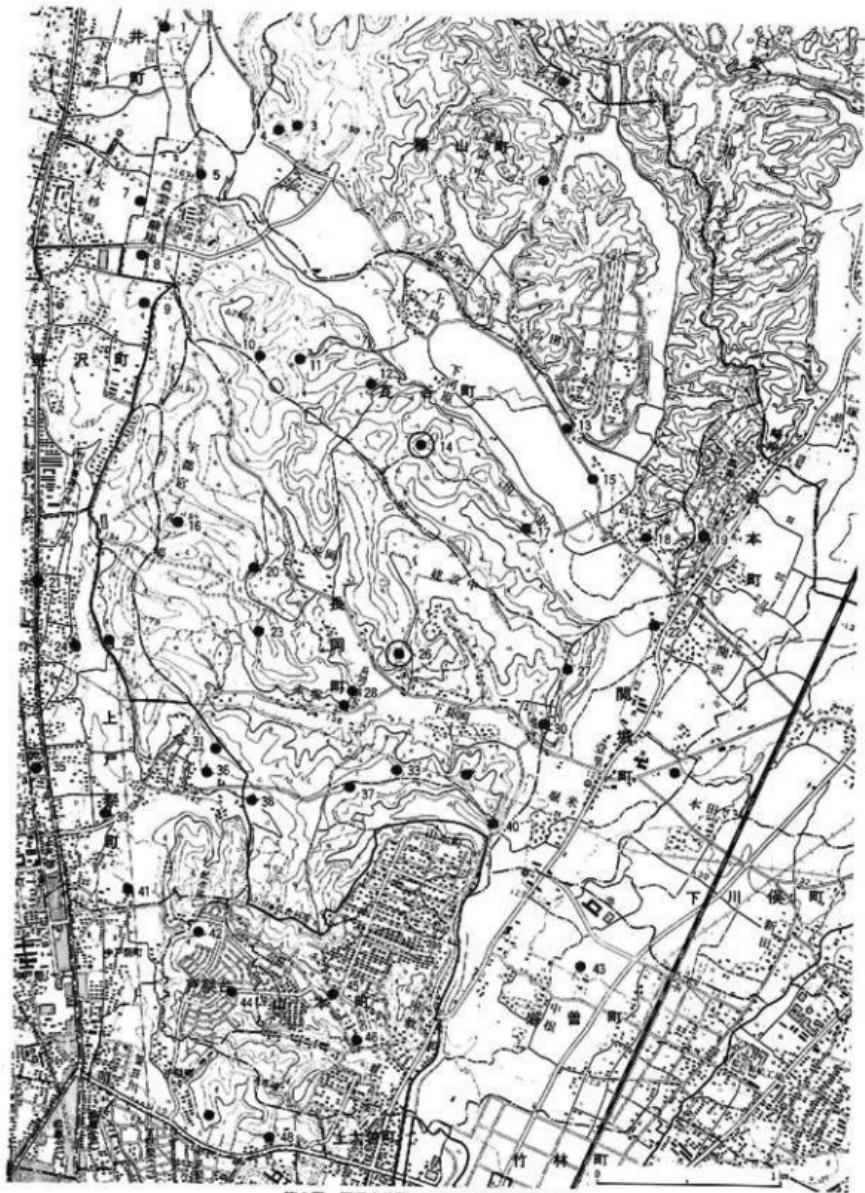
瓦塚古墳群及び日満遺跡は、宇都宮北部・田川中流右岸の低丘陵上に立地している。田川左岸の冲積地に広がる水田面からの比高差は、瓦塚古墳群が約50m（標高180m）、日満遺跡が約30m（標高160m）である。この両遺跡を戴せる丘陵は、宇都宮市内の遺跡密集地の一つであり、西は国道119号線（日光街道）南は市街地縁辺（八幡山周辺）まで伸びている。

古墳は、丘陵の中央部を東西に走る県道下岡本・上戸祭線（長岡街道）の西側に集中して所在している。長岡街道の北側には瓦塚古墳群の他、谷口山古墳群（第2図の30）、横穴墓の長岡百穴（同29）があり、街道からやや離れるが田川対岸の丘陵南端には前方後円墳3基を含む北山古墳群（同19）が立地する。街道の南側には、大ジノ古墳群（同31）、山本山古墳群（同44）さらには県指定の大塚古墳（同36）等がある。主な集落跡としては、繩文時代の三本松遺跡（同39）、田向遺跡（同40）、払面遺跡（同46）等があり、弥生時代の遺跡として野沢遺跡（同17）、野沢北遺跡（同5）がある。なお、須恵器の窯跡を含むと推定される次の上遺跡（同12）と古代瓦の供給窯として著名な水道山瓦窯跡群（同42）がこの丘陵内に位置することは注目される。

〔定岡明義〕

番号	遺跡名稱	市道跡番号	番号	遺跡名稱	市道跡番号	番号	遺跡名稱	市道跡番号
1	下金井遺跡	28	17	鷹次郎城跡	41	33	前坂供養塚群	61
2	宮内坪夷山遺跡	32	18	北の御跡	128	34	越ヶ入供養塚群	62
3	星の宮神社裏遺跡	35	19	北山古墳群	44	35	妙吉塚	124
4	寺山供養塚群	34	20	道半塚供養塚群	51	36	大塚古墳	57
5	野沢北遺跡	29	21	上戸祭一里塚	47	37	長山供養塚群	60
6	急仮塚遺跡	33	22	奥堀山用地遺跡	45	38	松ヶ丘遺跡	59
7	野沢遺跡	30	23	柴現山供養塚群	343	39	三本松遺跡	56
8	野沢石塚遺跡	31	24	高谷林一里塚	49	40	田向遺跡	63
9	野沢向山遺跡	46	25	上戸祭中島遺跡	50	41	根河原瓦窯跡	64
10	大久保牛塚	37	26	瓦塚古墳群	54	42	水道山瓦窯跡群	65
11	櫻畠遺跡	38	27	旧廢沢相模南供養塚群	342	43	堀之内遺跡	70
12	次の上遺跡	39	28	長岡百穴裏遺跡	52	44	山本山古墳群	68
13	曾理部遺跡	42	29	長岡百穴	53	45	入畠窯跡	66
14	日満遺跡	40	30	谷口山古墳群	55	46	払面遺跡	67
15	上の古遺跡	43	31	大ジノ古墳群	58	47	戸祭山犯塚古墳群	344
16	宇都宮ゴルフ場遺跡	48	32	戸用地遺跡	127	48	戸祭塚	71

第1表 瓦塚古墳群・日満遺跡周辺遺跡分布表



第2図 瓦塚古墳群・日満通路周辺道路分布図

(2) 遺跡の性格

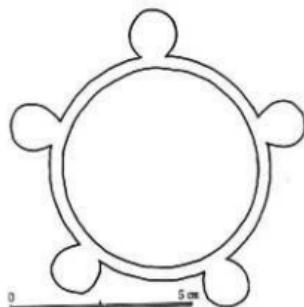
瓦谷・長岡両町にまたがる低丘陵は南東方向に続き、これ等山並みの北東山麓を洗って南流する田川に沿って、幅200mから300mに及ぶ帯状の湿田地帯がある。これは古くから田川が洪水等にて氾濫する度に流路を変え、付近は葦・ネコ柳の繁茂する沼であったと思われる痕跡であり、これに接する左岸台地には横山町高田前から瓦谷町上ノ台、関堀町土用地へと往時の河岸段丘が続いている。また、これらからの湧水は幾筋かの小川となって山間の水田を潤し田川に流入する。

湿地に水を求めて群がる鳥獣を追い、魚貝を取り、山野に果実・根菜をあさる先史時代。又、段丘上の肥沃な土地と水に恵まれたことは初期農耕の原史時代人にとって、この様な立地条件は最も恵まれた生活の場であったと思われ、田川をはさんだ両岸には数多くの遺跡が確認されている。しかし、前述の様に田川右岸は山林地帯が多く総ての遺跡確認是不可能であり、又、現地付近は市街地近郊のため、宅造等にてすでに破壊消滅した遺跡も数多く、本地域も例外ではなく、蛇山団地遺跡・谷口山古墳群の大平等はその一例である。

日満才の内と北久保遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡であるが、ここには当時立正大学文学部助手として考古学研究室に勤務せられて居った坂詰秀一先生が調査に來訪され、又、氏家町の土屋喜四郎先生、更に好事家が遺物収集に再三訪れるなど古より知られた遺跡である。本遺跡に接する西側の字上野、笹山更に東側の字日向、立野付近までわずかながら遺物が散見される事から、あるいは広範囲にわたる遺跡である可能性も考えられる。特に字立野の一角には土師器片が多量に見られる。

瓦塚古墳群は既に『豊郷村郷土誌』『河内郡誌』等により広く周知のものであるが、古くは国学者梅園春男先生の注目された古墳群である。近傍には谷口山古墳群・百穴横穴古墳・大ジノ古墳群等があるが、中でも瓦塚古墳群は40数基を数える市内随一大古墳群である。これらの中には桑畑造成等にて墳丘の削平されたものもあるが、周溝、回埋葬施設等は遺存するものと思われる。なお、谷口山の尾根及び字立野には各7、8基の高塚が点在するが、立地及び規模から考えて供養塚群と思われる。

終りに本稿を逸脱する疑義なしとせぬも、十数年前瓦塚古墳群中の一円墳より烟造成の折り白銅製五鈴剣の出土があった事を記し、先学諸氏の参考に供したいと思う。 [小堀時蔵]



第3図 瓦塚古墳群出土鈴剣

2 調査の経過

「長岡ニュータウン」が、丘陵上の住宅団地として造成されるにあたって、開発に関する事前協議が行われ、宇都宮市の関係各部局からニュータウン造成に関する意見が提出された。

埋蔵文化財行政を主管する当教育委員会社会教育課では、ニュータウン造成計画区域内に「瓦塚古墳群」の一分と縄文時代の遺跡地が含まれているので、開発にあたってはこれ等埋蔵文化財の取り扱い方に十分留意するよう要望した。

その結果、瓦塚古墳群のうち25号・26号及び32号墳は、造成計画上現状変更せざるを得ないと結論に至り、発掘調査を実施して記録に残すことに決定した。

調査は、昭和48年11月21日から10日間の予定でます瓦塚32号墳の発掘を実施した。

この32号墳の発掘調査以前の状況は、封土が確認できないほど低い墳丘の小円墳であったため、発見されたのは主体部の石室の一部が露出してからであった。

次に発掘調査を実施したのは、瓦塚25号及び26号墳で、調査期間は昭和50年7月20日から8月20日の1か月間であった。

この25号・26号墳は、事前に所在を確認していたので発掘以前に現況調査を行い、調査團を編成して調査に臨んだ。

日満遺跡は縄文時代の遺跡地であり、昭和55年3月26日から~4月5日と7月10日~9月6日の二次に分けて調査を実施した。

なお、開発事業者から提出された「念書」は次の通りである。

〔定岡明義〕

念書

(開発地域) 宇都宮市長岡町、瓦谷町、関塙町地域

(開発事業名) 長岡ニュータウン

当社が新興都市開発株式会社から譲り受け計画中の土地利用計画地内に所在する埋蔵文化財については、文化財保護法の趣旨に従い下記のとおり処置することを確約いたします。

記

- 確認された、つぎの埋蔵文化財包蔵地については、整備の上保存する。
(所在地図) 20, 21, 22, 23, 24, 号墳
- 確認されたつぎの埋蔵文化財包蔵地については、計画上、現状保存が困難のため、施行前に所定の手続きを経て発掘調査を実施した後、県・市教育委員会と遺跡の処置について協議のうえ、工事に着手する。なお、発掘調査に要する経費は当社負担とする。
(所在地図) 25・26号墳 戸中塔 供養塚
- 工事中に埋蔵文化財が発見された場合は、現状を変更することなく県・市教育委員会に連絡し、上記1, 2により処置する。
- 施工にあたっては、適宜県・市教育委員会の指導を受ける。

昭和53年1月13日

開発事業社名 東京都千代田区神田錦町1丁目2番地2

大林不動産株式会社東京本社 専務取締役 (氏名)

宇都宮市教育委員会役

II 瓦塚古墳群

1 瓦塚古墳群の概要

古賀志山塊から東に延びる宇都宮丘陵は、市街地に近付くにつれて高さを減じ、丘陵の南端部に位置する宇都宮市立八幡山公園付近では、標高約140mを測る。

瓦塚古墳群は、市街地の北方約2kmの宇都宮丘陵の尾根上に立地しており、標高約180~150m付近を中心で分布している。古墳群の南側眼下には、丘陵を南北に分断するように入り込んだ幅約150mの谷が東西に走っており、現在は水田に利用されている。水田面での標高は、約130mである。

瓦塚古墳群は、昭和58年の分布調査では瓦塚古墳(主墳・前方後円墳)と41基の中・小円墳が確認されていたが、現在では瓦塚古墳を含めて32基が確認できるだけである。

本古墳群は昭和58年の分布図から、主墳である瓦塚古墳付近から南西に張り出した小支脈に分布するA群(第20~25号墳)、瓦塚古墳を載せて南に延びる尾根上に分布するB群(第16~19・24・25・27~30・42)、B群の東側に平行して南に延びる支脈上に分布するC群(第10~15・41号墳)、丘陵の南端付近を東西に延びる尾根上に分布するD群(第1~6・31~40号墳)、丘陵の南裾部に分布するE群(第7~9号墳)、群の北西部で、丘陵の最高所に一基だけ離れて立地するF群(第26号墳)の6群に分けることができよう。これらの群はA群が4基、B群が11基、C群が7基、D群が16基、E群が3基、F群が1基であり、群を構成する古墳の数にはかなりの差があるが、A・C・Dの3群では群中に1~2基の中程度の規模の円墳を含んでいることがうかがえる。これに対してB群は構成数11基中、前方後円墳1基、中規模円墳4基で、他の群とは大きくその様相を異にしている。

[山ノ井清人]

番号	形態	直径	高さ	斜面	備考	期別	百尺	度数	百尺	斜面	備考	期別	百尺	度数	百尺	斜面	備考	期別
1		8.8			（昭和58年1月調査時 既に土石積み廃止）	13	円	17	25			23	円	20	2			
2	円	8.5	2.4	複式A 右半	右半の一基が倒壊	16	円	16	1			26						（昭和58年3月調査時 既に土石積み廃止）
3				複式A 右半	（昭和58年1月調査時 既に土石積み廃止）	17	円	25	2.3			31	円	16	1.3			（昭和58年3月調査時 既に土石積み廃止）
4					（昭和58年1月調査時 既に土石積み廃止）	18	円	22	2			32	円					
5				複式A 右半	右半の半周に残存した 部分	19	円	20	2			33	円	16	2			（昭和58年1月調査時 既に土石積み廃止）
6	圓	15	2	複式A 右半	丘陵上部斜面が倒壊し、 右半が一部倒壊	20	円	15	1.5	複式A 右半	右半の一基が倒壊 （昭和58年1月調査時 既に土石積み廃止）	34	円	8.5	2.5			
7					（昭和58年1月調査時 既に土石積み廃止）	21	円	22	4			35	円	13	2.5			（昭和58年1月調査時 既に土石積み廃止）
8				複式A 右半	（昭和58年1月調査時 既に土石積み廃止）	22	円	16	1.4			36	円	16	0			
9				複式A 右半	（昭和58年1月調査時 既に土石積み廃止）	23	円	22	2			37	円	7	1			（昭和58年1月調査時 既に土石積み廃止）
10	圓	12	2			24	圓	45	3.5	複式A 右半	右半に複数個の 倒壊跡（左側、下 部）が確認された	38	円	12.5	1.5			
11	圓	9.5	0.5	複式A 右半	右半の一基が倒壊	25	円	18	1.1	複式A 右半		39	円	14	2.1			
12	圓	7.5	2.5	複式A 右半	右半の一基が倒壊	26	円	12	1	複式A 右半		40	円	14	3	複式A 右半		
13	圓	22	3			27	円	14	1			41	圓	8	0.5			
14	圓	14	2			28	圓	12	1	複式A 右半	右半に複数個の 倒壊跡（左側、下 部）が確認された	42	圓	12	1.5			



第4圖 瓦窯古窯群分布圖

2 瓦塚32号墳

(1) 立 地

本墳はD支群の中の1基で、南東に延びる尾根がやや東傾斜する地点にあり、標高約156mを測る。主墳の瓦塚古墳（前方後円墳）から南東約300mに位置している。

D群は南西約300m、南北約80mの範囲の尾根山に16基の中・小の円墳が密集している。本墳の周囲にも西約25mの第6号墳、南東約20mの第31号墳、北西約20mの第5号墳があり、それぞれの墳丘裾部が接するように営まれている。

本墳の北裾からやや北に寄ったところには、尾根をやや掘削した山道が、尾根筋に沿って東西に走っているため、墳丘の北裾から周溝にかけて一部が削り取られている。

(2) 墳 丘

本墳は丘陵の東斜面に築造された円墳であり、墳丘は極めて低かったようである。我々が現地に到着した時点ではすでに墳丘ではなく、天井石が露出した状態であった。工事関係者の談によれば、わずかな地影が認められたという墳丘の高さ、直径および形状など具体的な状況は全く不明である。周溝調査の結果から直径約14mを測ることが判明したが、墳丘はそれよりも小さく、確認した周のかなり内側に入っていたようである。

(3) 周 溝

トレンチ調査の結果、周溝は南北に長く、ゆがんだ精円形であることが判明した。外径は南北約14.8mで、ほぼ二等分した位置に玄門左袖が設けられている。東西は11.3mで、やはり玄門左袖がほぼ二等分した地点に位置している。

周溝の幅や深さおよび断面の形状は各部によってやや異なっているが、ローム上面での幅は1.2～1.5mを測る。底幅は0.5m前後、深さは m前後を測る。断面は開いたV字形および逆台形を呈している。概して主体部の北側から西側にかけての部分は幅が狭くて深いが、斜面の下方に位置する南側から東側にかけての部分は、幅が広く深い。

全体に周溝の掘削の仕方は乱雑であり、地形に応じた配慮は、ほとんどなされていないものと思われる。

(4) 土 層

本墳は、天井石が完全に露出するまで墳丘を削平した段階で調査を開始したため、墳丘の状況は全くといひほどわからない。

第1トレンチ(T1)では、黒色土(3層)とローム粒混入土(4・6層)およびローム粒を含まない黒褐色土を中心とした土が東西の周溝を埋め、さらに黄褐色土(1層)と褐色土(2層)が全体を覆っている。周溝は2層下のローム漸移層の上面で確認できたが、T1のほぼ中央にある墓道は1層で確認されている。本来、墓道が墳丘下に埋没してしまうものであることを考えると、周溝がほぼ完全に埋没したのち、何らかの目的で再び墓道を開掘したものと思われる。

第2トレンチ(T2)においても周辺内埋土はT1の場合と大方において同じであるがT2では2層が墳丘の中心に向かって漸次高くなっている。このことと、先に述べた墓道の再掘削と考え合わせると、各トレンチにみられる2層は、墳丘の盛土の一部であったものと思われる。また同じ理由から1層も同様の土層と考えて大過なかろう。

第3トレンチ(T3)では、この1・2層が墳丘の中心に向かってやや低くなる傾向にあるが、これは地形が南に下降する斜面であることと関係するものと考えられる。

(5) 内部主体

内部主体は、砂質凝灰岩(通称長岡石)の割石を乱石積みにしたT字形横穴式石室で、玄門左袖が墳丘のほぼ中心に位置するように設計されたものと思われる。

石室全体の形状は通常の横穴式石室の平面プランとはやや異なっており、玄室の主軸に直交する方向に羨道部が設けられている。つまり竪穴式石室の側壁中央に穴を開けて、そこに羨道部を付設したような形を呈している。石室は全長8.2mを測り、N-21°30'-Wを指す。

玄室は長さ(東西)5.05mを測る。両端での幅は1.3mを測るが、中央部付近では1.5mを測る。床面から天井石までの高さは2.3mである。通常の横穴式石室の奥壁に相当する北壁は、最下段にやや大きめの砂質凝灰岩割石を腰石として縦積みにし、さらにその上に同質で小形の石材を乱雜に積み上げている。東西両壁は、通常の横穴式石室の奥壁にみられる積み上げ方とはほぼ同じで、最下段に大形割石を縦積みにし、その上に小形割石を乱石積みにしている。南壁のほぼ中央には玄門が設けられている。石積みの方法も北壁とはやや異なっており、中小の割石を乱雜に積み上げただけで、北壁にみられるような腰石はない。床面には壁材と同じ砂質凝灰岩のパラスを一面に敷いている。

玄門は樋石・両玄門柱からなり、幅1.13mを測る。両玄門柱、柱状の割石を側壁に組み込んで羨道壁面と同一にそろえており、両玄門柱と側壁の両方の役割を果たしている。樋石は柱状の割石であり、両側壁に組み込まれた玄門柱が樋石を挟み込んでいる。玄門柱も樋石もともにローム層に埋め込まれている。

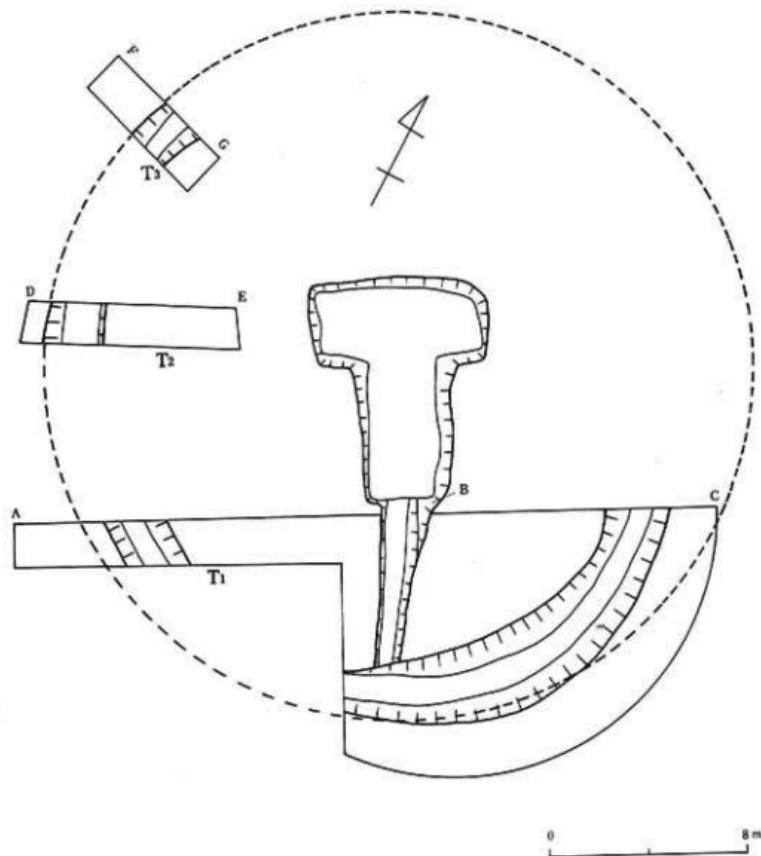
羨道部は、長さ4.4mを測る。幅は玄門で1.13m、中央部で1.27m、羨門内側で1.67mを測り、羨門からわずかずつ広がってきた側壁が羨門で急激に狭くなっていることがうかがえる。両側壁はそれぞれ4個の大形割石を腰石として縦積みにし、その上に小形割石を乱方積みにしているが、左側壁のところどころにはやや大きめの割石が混ぜられている。側壁と同質石材のパラスを敷いた床面は、地形が奥壁方向から羨道方向に傾斜しているにもかかわらずほぼ水平である。また玄室の床面よりも25mほど低く造られている。

羨門は玄門部とほぼ同じ構築状況で、側壁に組み込まれた柱状割石の羨門柱が、ローム層に埋め込まれた羨門樋石を挟み込んでいる。羨門の外部にも約1.1mの側壁がみられる。この部分は閉塞部で、砂質凝灰岩の中程度の大きさの割石が乱雜に積み上げてあった。床面には敷石などの施設はなく、ロームのままであり、そこから周辺まで墓道が続いている。

墓道は、幅0.7m-0.5m、深さ0.3mを測る構造の掘り込みで、羨門樋石の外側から周辺まで続い

ており、3.4mを測る。新面は開いたU字形を呈している。

天井石はやや丸みを持った大形の砂質凝灰岩割石で、玄室から羨門までが7枚で覆われ



第5図 瓦塚32号墳掘り方及び周溝全測図

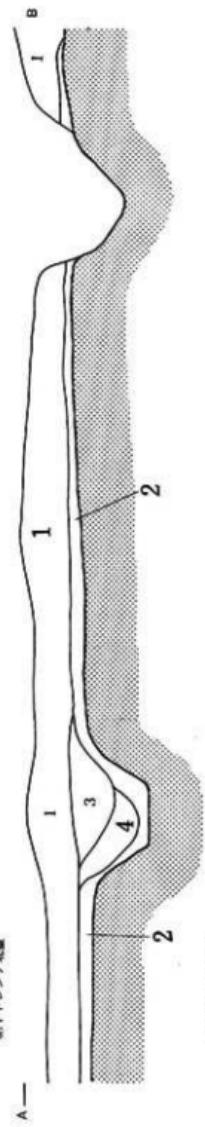


図1 レンチ北壁

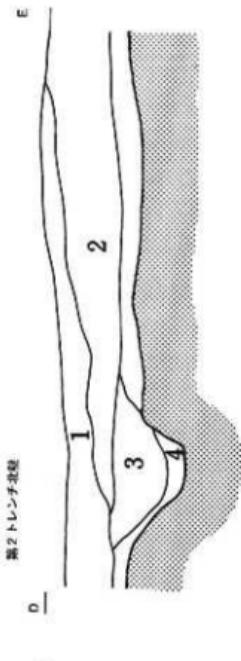
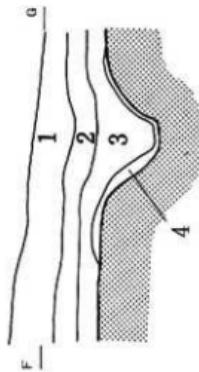


図2 レンチ北壁

- 1. 黄褐色土 (風土)
- 2. 棕色土 (風土)
- 3. 開土
- 4. 黄褐色土 (ローム混入)
- 5. 黄褐色土
- 6. 黄褐色土 (ローム多量混入)
- 7. ロームブロック (断面形状の記載)



新6図 瓦塚2号坑 レンチ内土壁図



ている。玄室の天井石は4枚で、玄室中央部に架けられた大形のものは羨道の一部をも覆っている。天井石は、玄室・羨道ともに壁の積石の最上段と二段目を後方にずらして天井石を受けるための段を造り、その部分に架している。したがって天井石のまわりを壁の最上段の積み石がとりまいてい るような形になっていた。

(6) 掘り方

掘り方は旧表土から掘り込んだもので、ローム層を深く抉っている。規模は石室のそれを大きく 上回っており、玄室で東西3.6m・南北1.7m・深さ2.3m、羨道部で南北2.9m・東西1.85mを測るが、 底面では全体に0.16~0.31mほど小さくなっている。底面は玄室から羨道までほぼ水平である。し たがって全体の深さは地形の傾斜に沿って奥壁から羨門に向かって漸次浅くなっている。

(7) 出土遺物

出土した遺物は少なく、玄室内からは東壁寄りの床面からは上腕骨片1が、中央寄りの床面から は大腿骨片1がそれぞれ出土した。また羨道部床面の左壁沿いのところから直刀4口と小刀1口お よび鐸1枚が、石壁沿いのやや玄門寄りのところから兵庫鎖と刀子1口がそれぞれ出土しただけ である。

直刀1 茎尻を若干欠くが、現存長96.8cmを測る。刀身は平棟平造りで、切先はふくらをなす。 関は刃関で、刃部からほぼ直角に茎に至る。茎には目釘穴が1孔みられる。

直刀2 茎尻と切先を欠くが、現存長83.4cmを測る。刀身は平棟平造りで、切先はふくらをな すものと思われる。関は刃関であるが、刃部から湾曲した茎に至る。茎には関寄りに目釘穴が一孔 みられるが、欠けた部分にも有ったものと思われる。

直刀3 刀身は三本に折れており、全長は不明である。刀身は平棟平造りで、切先は野切先である。 関は刃関であるが、刃部からゆるやかに湾曲して茎に至る。茎は茎尻でやや内反し、目釘穴は みられない。

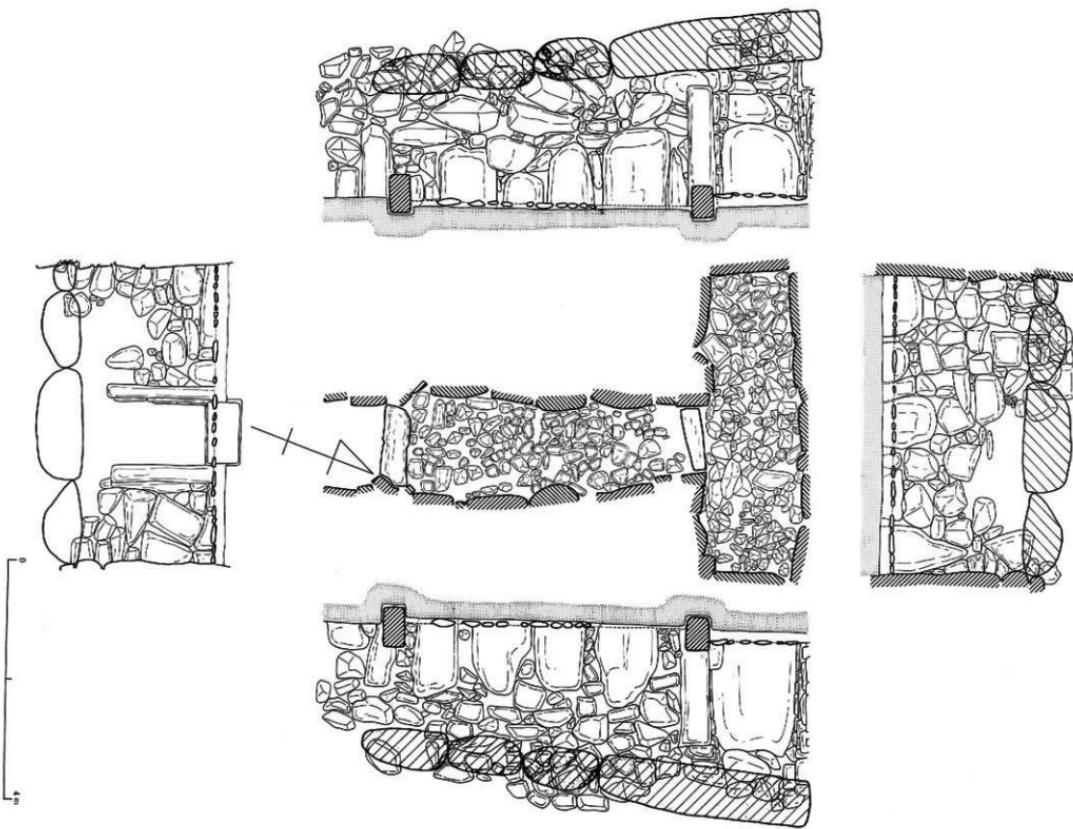
直刀4 茎尻を欠くが、全長76.2cmを測る。刀身は平棟平造りで、切先は野切先である。関は 刃関ではあるが、1~3に比べて不明瞭で、刃側は小さな角をなして茎に至り、棟側もゆるやかに 先細りになってゆく。茎尻に近い位置に1孔の目釘穴みられる。

直刀5 二つに折れており、全長は不明であるが、小形直刀である。刀身は平棟平造りで、切先は 野切先である。関は刃関であるが不明瞭で、刃側は刀身から小さな角をなして茎に至り、棟側も 漸次細くなっている。また関部には鉄製籠が銹着している。茎は短かく、茎尻寄りに目釘が遺 存している。

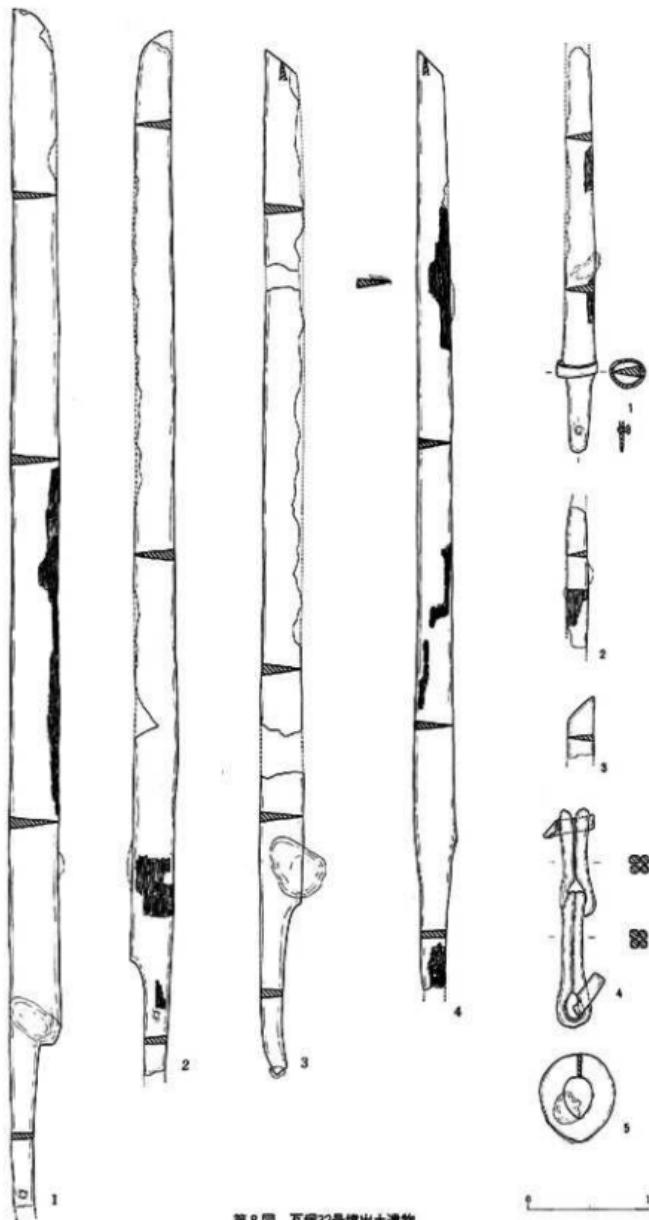
刀子 切先と茎を欠くが、現存長11.3cmを測る。平棟平造りである。

鐸 板状の無窓倒卵形鐸である。やや小形であることから考えると、直刀5に装着されていたも のと思われる。

鎧 U字形に折り曲げた環を連結させた、2連の兵庫鎖である。一方には両端が板状を呈したU 字形金具の一部が銹着しており、他方には棒状になった鉄製部品の一部が銹着している。U字形金



第7図 瓦坂32号墳石室実測図



第6圖 瓦罐32号出土遗物

—15—

具の形状から考えて、木製壺鑓を懸垂するための部品と兵庫鎖と思われるが、棒状の部品の一部が
鉤具であるのか兵庫鎖であるのかは不明である。

(8) 年代について

先述したように本墳からの出土遺物は少なく、直刀5・刀子1・鏡1・木製壺鑓金具1である。
このうち本墳の築造年代を推定するに足る資料はほとんどない。

例えば直刀1～5は5世紀後半以後に位置付けられる古墳から一般的に出土するものである。直
刀5は茎の形態からみてやや新しく位置付けられるものであるが、それとて6世紀後半頃からみら
れるものである。

兵庫鎖の下端に着装したU字形吊金具で木製壺鑓を吊下げる壺鑓は、すでに6世紀前半にはみら
れるが、6世紀後半には木製壺鑓の上部に着装したU字形金具を、革などの帯で吊下げる壺鑓が多
くなってくる。しかし兵庫鎖を使用するものもみられる。

本県でも6世紀末～7世紀初頭頃と思われる鹿沼市狼塚古墳からはU字形金具を兵庫鎖で吊下げ
た木製壺鑓が出土しており、その一方で同じ頃に考えられる宇都宮市浅間山古墳からはU字形金具
だけの壺鑓が出土している。つまり6世紀後半以後、2形態の壺鑓が並存していたものと思われる。

したがって、本墳出土の兵庫鎖使用の木製壺鑓の年代も6世紀前半以後という位置付けしかでき
ない。

今後は、形状や構築技法に特異な様相を示す内部主体から年代や性格について考えていかなければ
ならない。

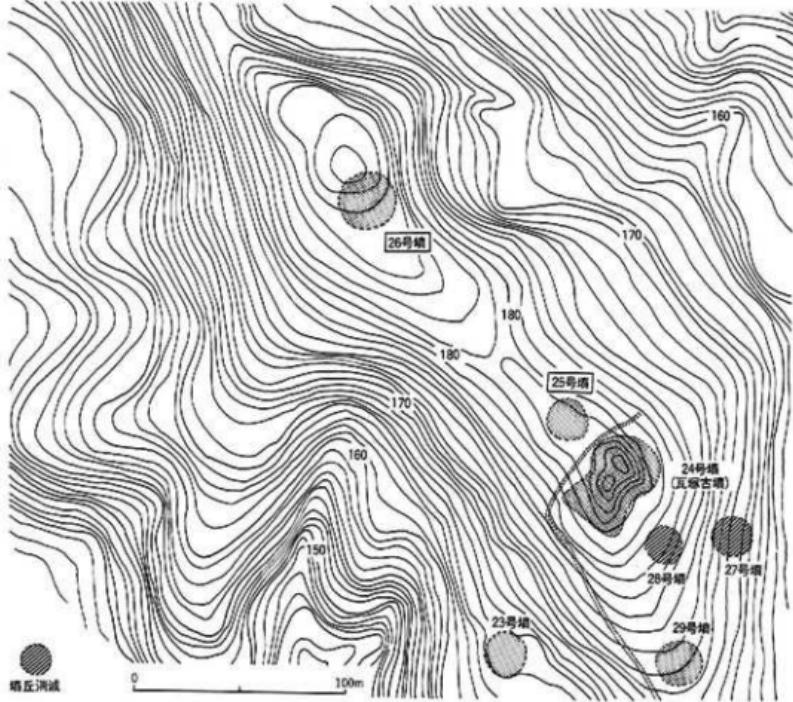
〔山ノ井清人〕

3 瓦塚25号墳・26号墳の概要

瓦塚25号墳は、本古墳群の主墳である瓦塚古墳(前方後円墳)に北接する円墳である。25号墳の周溝南端と瓦塚古墳周溝北端の距離は僅かに4mである。26号墳は瓦塚古墳から北西約200mの尾根頂部に立地する円墳である。25号墳と26号墳の間の尾根には古墳の分布は見られず、本古墳群の全体の占地からみれば26号墳は他の古墳から独り離れて古墳群の最奥に立地している。従って標高は最も高い地点になる(第4図)。

ここで本古墳群の立地を改めて概観すると、中心丘陵の南部に放射線状に広がる4つの小尾根の頂部にはほぼ直線状に分布する円墳群である(42基・現存32基)。放射線が集まる中心に瓦塚古墳が位置し、従って25号墳とも親丘陵上に立地している。古墳群は標高140m代の南及び東面する斜面から180m代の山頂にかけて築造されている。破壊や盗掘等により確認できる10数基の主体部は全て横穴式石室である。

〔大金宣亮〕



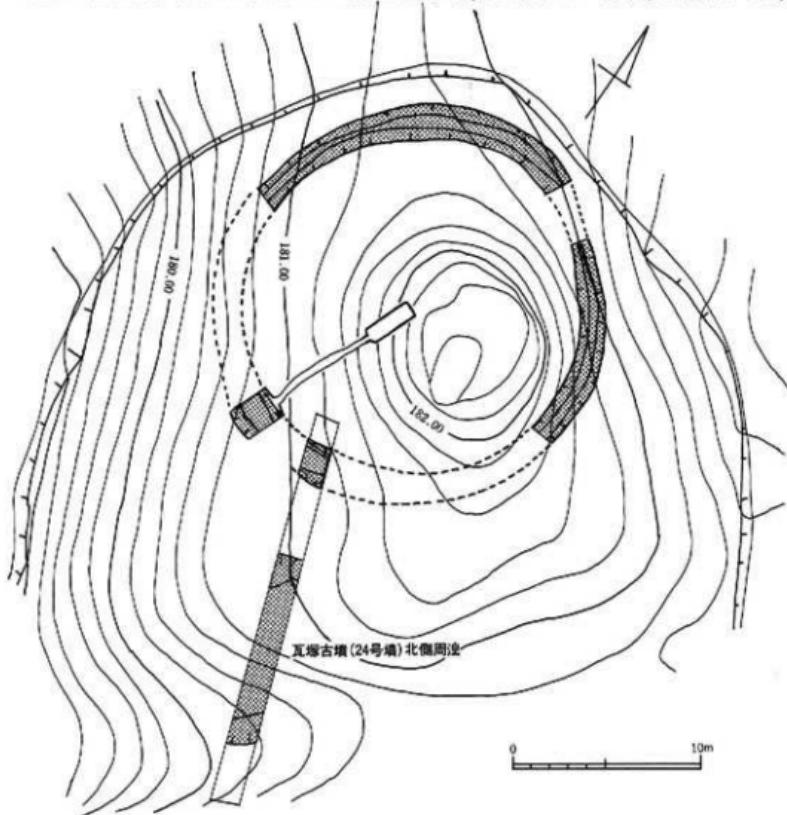
第9図 瓦塚25号墳・26号墳位置図

4 瓦塚25号墳

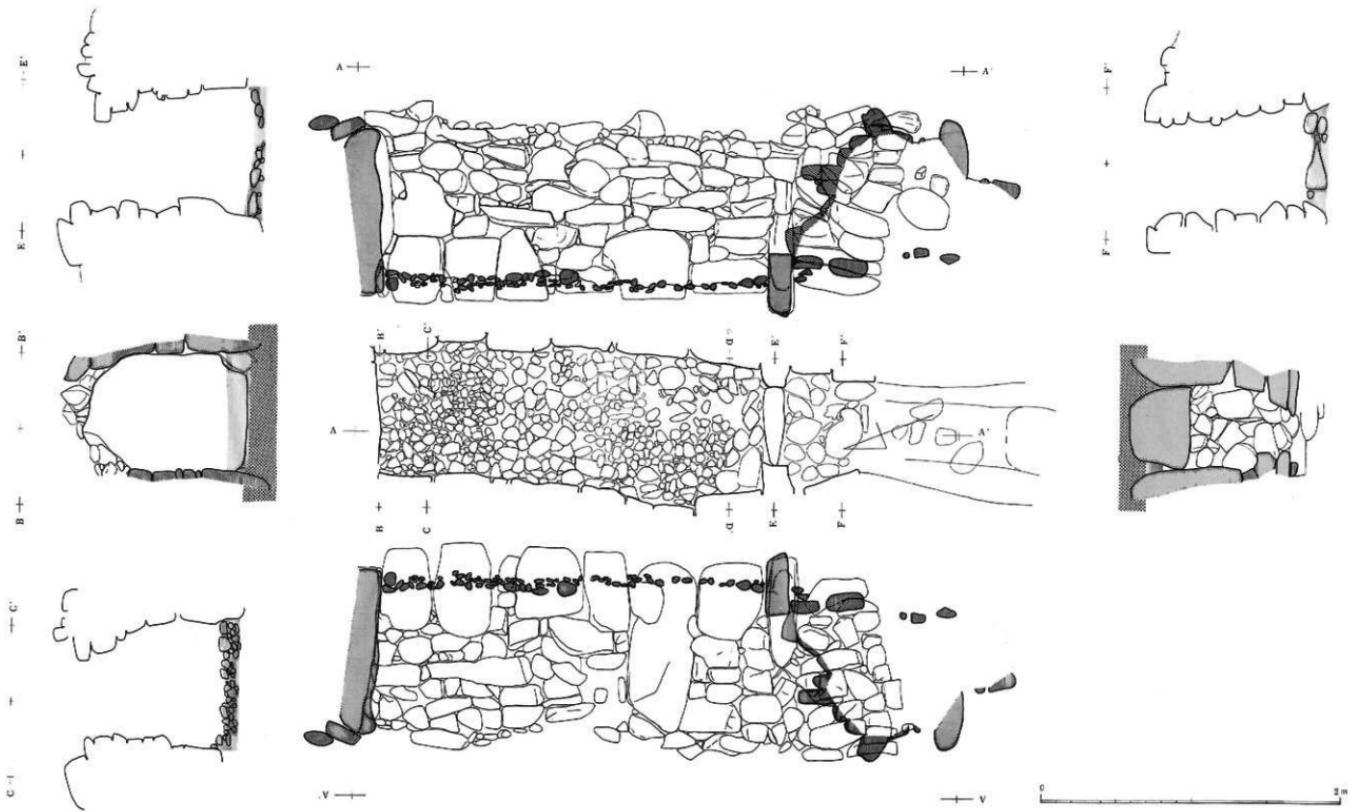
(1) 墳丘

調査前の現況は生い茂る葛科の草木を刈り取って初めて山頂に円形の地彫れが確認できるものであった。地彫れは緩やかに南方に低く広がり、そのうちでも、北面が原状に近いものかと思われた。調査結果は地彫れの頂部が墳丘の中心とはならず、築造時の墳丘からは原状は大きく変っていることが判明した。

墳丘の原形は直径18m、高さ1.4m前後に復原され、中心に横穴式石室の奥壁が位置する。石室は南方に玄門を開き、幅0.7m、深さ0.3m前後の墓道が周溝まで達している。周溝は幅1.5~2m、



第10図 瓦塚25号墳丘実測図



第11圖 瓦堆25號墳石室實測圖

深さ0.4m前後を測り、円形に廻る。墳丘につづいて要約すると

1. 本墳は直径18m、高さ1.4m前後の規模を持つ円墳である。
2. 周溝は幅1.5~2m、深さ0.4mの浅いものとなる。
3. 中心部から南方に横穴式石室を持つ。
4. 石室は近くに産する凝灰岩（長岡石）の割石が主材である。

なお、墳丘の南方に設定したトレーナーで幅10.4mの瓦塚古墳の北面周溝が確認された。本古墳と瓦塚古墳の周溝外側の距離は約4mと至近である。

(2) 内部主体

現表土下約0.3mのところから横穴式石室の天井石が検出された。石室側壁の下段一列は面をそろえた大きめの凝灰岩を立て、その上部に凝灰岩の割石を小口積みにして構築してあるを石の大きさは統一されてはおらず、中には河原石も使用されていた。壁石間の目地には小片に碎いた凝灰岩や小さな河原石を用いる。

奥壁は1.05m×0.8m、厚さ0.2mを超える凝灰岩の一枚石である。側壁最下段の大石は底部を10~25cm床面下に埋め込み、天井部に行くにつれわずかに持送り気味に立ち上がっている。石室の平面プランは両袖型の横穴式石室となり、長方形の玄室床面には小礫が全面に敷かれている。敷石下には、凝灰岩の碎縁が敷かれている。つまり床面敷石のパッキング材に碎石を利用している。

玄門部は、凝灰岩で造られ、両側の玄門柱が、間仕切石をはさむ。26号墳の玄門柱が一枚石を使用するのに対し、本墳のそれは最下段の柱石にやや大形の石を立て（左側柱：縦0.75m、厚さ0.17m）その上に小形の石を積んでいる。従って玄門の天井に付く明確な眉石は無く、蓋石のレベルが玄門の天井となる。

羨道の床面は玄室のそれよりも約15cm程高い位置に造られ、床面にも玄室より大きな河原石を用いて、堅固に構築される。玄門の閉塞は、玄門の外側に10~20cm大の凝灰岩と河原石を積み上げることによってその目的を果たしている。（第10図、セクションD）。

最後に石室の法量を示すと石室長3.5m、このうち玄室長2.54m、幅0.9m、高さ1m。羨道は約0.6mが石室の施設を持ち、その前面は素掘りの墓道につながっている。

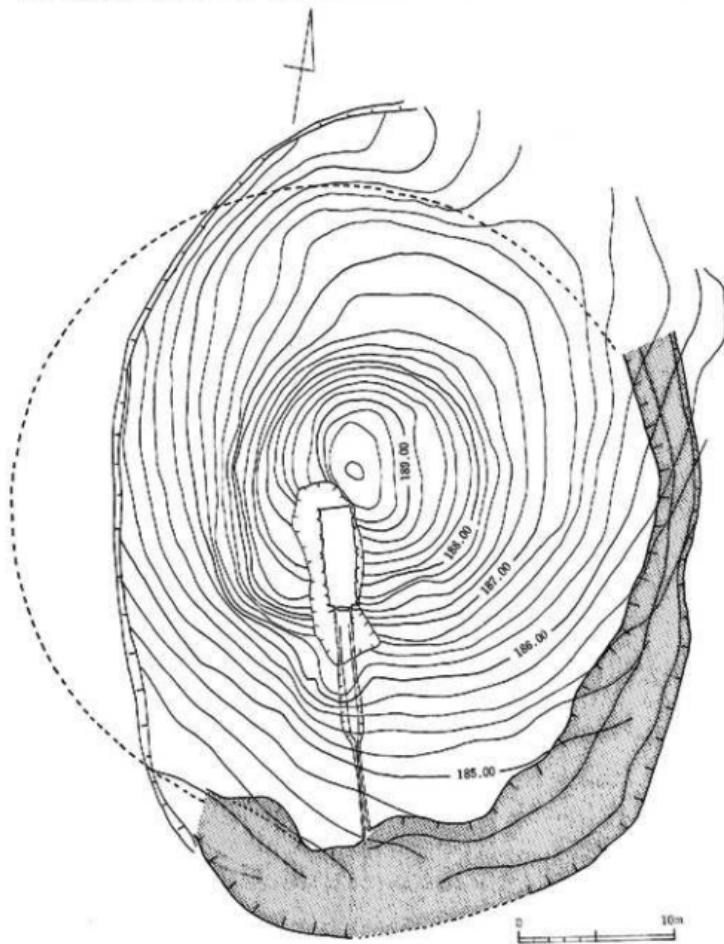
石室の保存は良かったが、石室内にあるいはその他調査区から遺物の検出は見られなかった。

〔大金宣亮〕

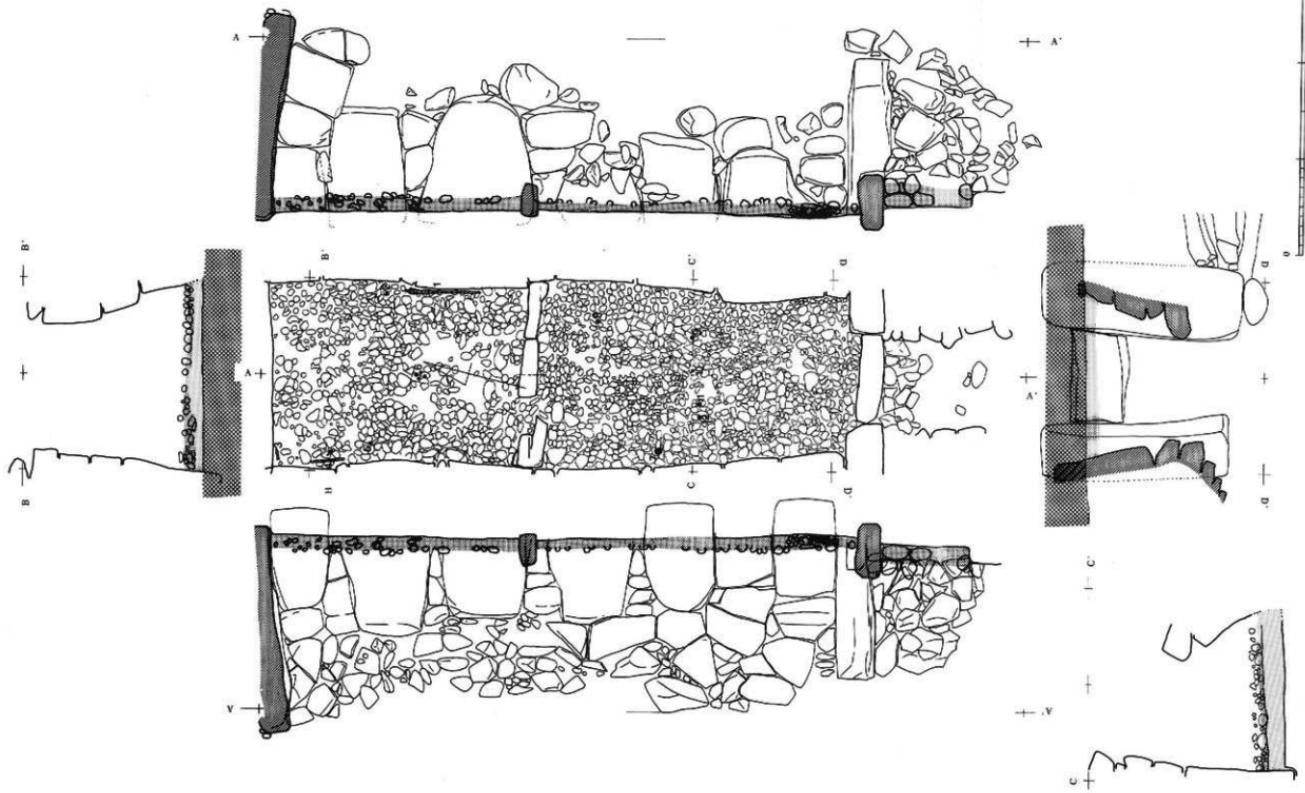
5 瓦塚26号墳

(1) 墳丘

尾根の頂上部に立地するので、外形の現況からはかなり高いマウンドに見られる。西側の墳蓋部



第12図 瓦塚26号墳丘実測図



がマウンドに沿って崩されている。墳上部の南方には盜掘によって大きな穴があけられ、主体部石室天井が露出し、ことに玄門付近の破壊がひどく、壁の崩壊は地上からも看取することができた。

同塙は南北部を調査したが、その内径や幅も不整形である。周塙の底面のカーブは緩やかで最も深い部分でも1m弱ぐらいで概して浅い。幅は狭いところで1.3m、広い部分では約7mを測り、円形に廻る。これから復原できる本墳の直径は40m前後で、墳丘の高さは南方で約5mである。北側は尾根の頂部になり先の計測値よりも低くなる。直径の規模からすれば、本古墳群の中では大型に属する円墳である。墳丘の途中に段状の施設等は見られない。

(2) 内部主体

凝灰岩によって構築される複室構造の両裾型横穴式石室である。奥壁が墳丘の中心付近に位置し、南方に玄門部を向ける。石室の中軸線は、N14°Wとなり、羨道から直線的に延びる羨道はそのまま周塙に落ちている。

石室の造りは、基本的に25号墳の築法に類似し側壁の最下段に大石の凝灰岩を据え、その上部に同石質の割石を積み上げる。しかし、最下段の側壁の石は25号墳に比べ上きく幅2m前後、高さ2.5~3m前後のものが多い。上部に積む石も同様な傾向を示している。側壁大石の内面には鉄製工具による面取り加工痕が見られる。しかし、木口や側面に切込み加工等の技法はないが、石の側面組合せ方にかなり正確な技術を窺える部分もみられる。玄門についても、仕切り石をはさむ左右の側柱石は各一枚である。奥壁は凝灰岩の一枚石(2.14×1.92×0.22m)になる。

玄室の床面は全面に河原石の小礫を敷き、パッキングに凝灰岩の碎石を用いる方法は25号墳に共通するが、本墳は玄室の中央部に間仕切石を置き複室を意識させる構造を持っている。羨道の床面は玄室のそれよりも少し高くなり、床面にも玄室の敷石より大きな河原石を敷く。閉塞部の石はすでに取り去られ、調査で確認することはできなかったが扉等を用いた痕跡は検出できず、羨道に凝灰岩や河原石を積み上げて塞ぐ25号墳と同様な方法がとられたものと思われる。

玄室の間仕切は凝灰岩の切石を1列に並べるが、その位置(奥壁から2.8m)はすでに石室構築時には決定していたらしく、両側壁の底面石の掘え方がそれを意識した造りになっている。副葬品は前室、後室両方に出土し、両者の副葬品に際立った質的差異は認められず、時間的に前後はあるにしても、棺の埋納には双方の室が使用されたものと思われる。

石室の計測値を示すと石室長7.73m、玄室長6.12m(前室3.3m、後室2.7m、間仕切幅1.2cm)、玄室幅1.9m、羨道長1.36m、羨道幅0.9m。

天井石は羨道部を含めると4枚の凝灰岩が使われたと思われるが、盜掘による破損が激しく、ことに東側壁の崩れが大きかった。

[大金宣亮]

(3) 出土遺物(副葬品)

石室内からは直刀2口、鉢1本、刀子1口、骨破片、勾玉3個、金環5個、ガラス小玉41個が出土している。盗掘がなされた際原位置を勤いた遺物も多い。またガラス小玉等は、石室内埋土をふるいにかけて検出したものが大部分である。

直刀（第14図、第15図1）

長い直刀（第14図）は、全長89.4cm、刃部長78cm、茎部長11.4cm、刃部幅2.9~3.3cm、茎部幅は区部で2.5cm、茎尻で1.5cm、棟幅0.7cmを測る。平棟平造り、フクラ切先の直刀である。区は両区で棟区0.5cm、刃区0.3cm、それぞれ直に落とす。区から5.7cmの位置に目釘が残存するがどちら側から打ち込まれたかは不明である。目釘から推定すると厚さ1.3cmほどの柄木を2枚合わせにした柄が予想される。茎尻は刃方に斜位に落として終わる。鞘は不明であるが鐔は第15図3が着装されていたと思われる。

短い直刀（第15図1）は鍛化が進み特に切先が著しい。全長40cm前後、刃部長31.5cm前後、茎部長8.5cm、刃部幅2~2.7cm、茎部幅は区部で1.7cm、茎尻で1.4cm、棟幅0.7~0.8mmを測る。平棟平造り、ややフクラの枯れた切先が予想される。刃部中央付近で折れており接合してもかなり曲がっている。人為的な力が加わったか否か不明であるが、曲がって折れたと判断される。区は両区で棟区0.6cm、刃区0.4cmで直に落とし、やや棟区のほうが深い。茎の刃方はまっすぐに棟方がやや直線的に平の幅を減じて茎尻に至る。茎尻は刃方に斜位に落とす。区から7.2cmの平の中央部に佩裏から目釘が打ち込まれる。目釘周辺から茎尻にかけて柄木の一部が残存する。鞘は鉄製で長径3.2cm、短径1.8cm厚さ0.3cmの断面梢円形。区側に折り返しを持たない素環円筒状である。鞘内面にも柄木の一部が付着している。

鉢（第15図2）

鉄製完成品である。全長23.7cm、袋部と刃部の境は不明確であるが袋部長10.6cm、刃部長13.1cm程になると思われる。刃部は幅2.3cm程で鍔のない断面丸造りで最大厚0.4mm、鉢先は広鉢を呈する。袋部は厚さ0.2mm程の鉄板を断面方形に折り曲げてつくられている。内部には木質が残る。鉄板の合わせ目はやや薄く鍛えてあり径2.5mmほどの小孔が端部から1cmのところに1個穿たれる。釘は失われているがこの孔は袋部に挿入した柄と鉢身の固定用の目釘孔と考えられる。対面の孔は観察されず、目釘1本を柄木に打ち込む構造である。やや簡単な構造であるが突き刺す機能を考えればそれほど不都合は感じさせない。なお、柄尻に着装されたであろう石突は検出されなかった。

鐸(第15図3・4)

3は全体の約 $\frac{1}{3}$ を欠くが長径7.5cm、短径6.2cm、厚さ0.2mmの鉄製。台形の窓が打ち抜かれ、おそらく六窓倒卵形の鐸であろう。前記したように鐸の具合から第14図の直刀に着装された可能性が強い。出土位置も長い直刀(第14図)の茎部に近く、両者の関連を強くする。

4は全体の約 $\frac{1}{3}$ を欠損する。3に比較してやや角ばった形態が予想される。八窓の鉄製鐸であろうか。石室埋土中から出土した。

鐸(第15図5)

鐸の破片で半面を欠く。鉄製。長径3cm、短径1.5cm程に復原される。第15図1・6等に着装された素環円筒状の鐸とはちがい区に接する部分を0.3mmほど内側に折り曲げて柄木の堰としている。この形態の鐸は両区をもつ刀身の構えと思われるが、この鐸に見合う刃身は検出されなかった。内面には柄木の一部が残存する。

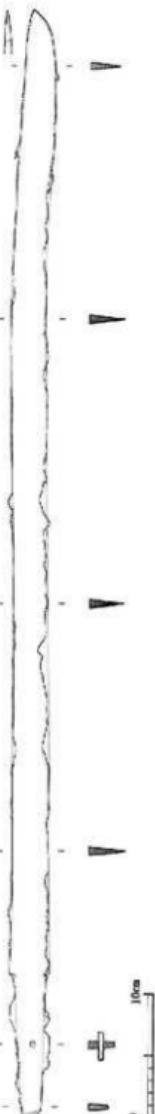
刀子(第15図6)

茎尻を欠損する。残存長10.1cm、鉄製で鋒化が著しい。刃部は研ぎ減りが著しく、長年使用した被葬者の愛用品であろうか。鐸は茎部ではなく区を越えて刃元部に鑄び付いている。長径1.8cm、短径1.4cm、厚さ1~1.5mm程の断面梢円形の素環円筒状を呈する。内面には木質が残る。区はゆるやかな刃区をもつ片区である。

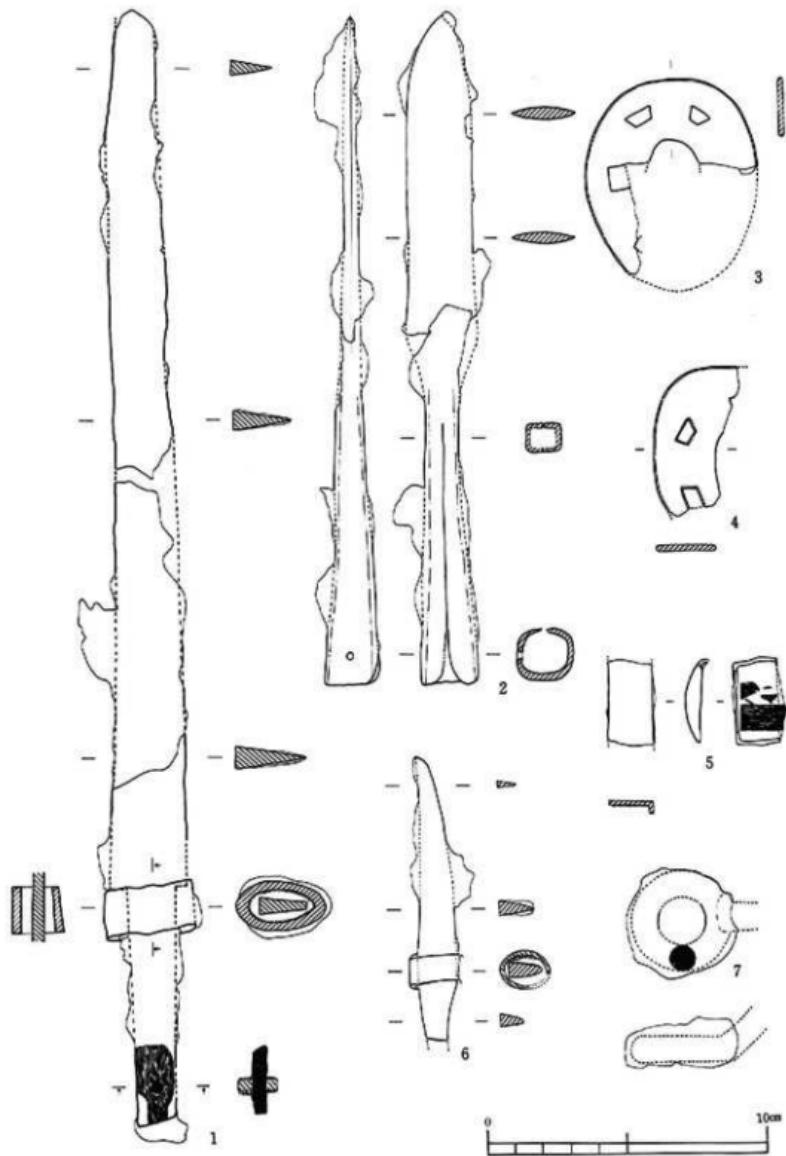
轡破片(第15図7)

外径3.5cm、内径1.7cm程の円環であるが鋒化が著しい。1か所剝離痕が観察される。この部分に棒状の引手部がつく引手臺の部分であろう。

〔小森哲也〕



第14図 瓦塚26号墳出土遺物実測図(1)



第15図 瓦塚26号墳出土遺物実測図(2)

6 まとめ

瓦塚古墳群の古墳分布を平面的に見ると、中心に瓦塚古墳(24号墳)が占地され、築造時からその位置を考慮されていたと思われる。

本古墳中唯一の前方後円墳である瓦塚古墳は1899年(明治32)発掘調査が実施され、凝灰岩積の横穴式石室(玄室長約5.8m、幅0.9m)から馬具(轡・兵庫鎖・雲珠・鉗具)、武器(直刀・鐸・刀子・鐵鎌)、装身具(管玉・切子玉・小玉・金環)土師器、須恵器などの副葬品の他に円筒埴輪、人物を含む形象埴輪の出土を見ている(注1)。このように瓦塚古墳は占地・形状・規模さらに唯一の埴輪祭祀を見ることなど、またその内容にも他の古墳に比し、極だった優位性を示している。しかし、石室については側壁に凝灰岩の割石、奥壁に1枚石、下床を小石敷にする方法などは付近の古墳(注2)に共通するが、玄室の規は今回調査した26号墳の玄室規模(長6.12m、幅1.9m)に上位を譲る。

凝灰岩の石室は本古墳が所在する旧河内郡から都賀郡域の大型の後期古墳にしばしば見られ、石材の構築技法などからその変遷を理解しようとする論究がある(注3)。初期石室は切石加工の凝灰岩を石室の一部(玄門部など)に使用され(6C後半~7C初頭)、やがて側壁にも切石が使用され終末期(7C前半)の石室は四壁を切石の1枚石で組まれる変遷をたどるが、瓦塚古墳群およびこの付近には切石1枚造りの石室は見られない。

一方、埴輪祭祀は西暦600年前後には終りを迎える、その後間もなく前方後円墳もその姿を消すことが知られている(注4)。瓦塚古墳群の形成期については、すでに先学の位置づけがあり(6C末~7C前半)(注5)、今回の調査でも、これを動かす程の資料は検出されていない。

次に瓦塚26号墳の特徴を整理すると、

1. 古墳群中最大の円墳であり、玄室規模は24号墳前方後円墳を上回る。
2. 石室側壁は割石積で最下段に大石が据えられ、奥壁・玄門(柱石)は大形切石になる。これらの手法は付近の古墳に共通するが玄門の柱石の組み方に差異がみられる。
3. 玄室は間仕切り石より前後2室に区切られ、双方に装身具などの副葬がみられる。32号墳の特異な丁字形石室にみられる遺物の出土状況と異なり、両室は同様な目的に使用された可能性が高い。
4. 墓輪祭祀がみられず、他の古墳から離れ頂部に立地する。

こうした様相を他の古墳と時間差に置き代えることは早計であろうが、26号墳の遺物に倒卵形6窓の鐸両区の直刀が含まれるとのなどを加えると、26号墳をやや新出の様相に理解することも可能であろう。従って、26号墳が瓦塚古墳群の中でも新しい段階に築造されたものとすることができよう。その時期を7C前半に位置づけたとしても、先の埴輪祭祀、前方後円墳の消滅期の問題にも矛盾はないと思われる。

末筆になりましたが発掘に参加された方々（当時、宇都宮大学考古学研究会）を名記するとともに報文刊行にご尽力いただいた定岡明義氏（市教委）・株大林不動産に衷心より感謝をいたします。

○発掘参加者

斎藤一男、満石力也、薄 猛、小森啓也、柿沼 誠、藤沢敬幸、寺沢洋子、斎藤康子
杉山京子、豊田幸子、篠崎玲子、山口由美子、水谷和子、岩渕孝子、宮崎光明、石川
和範、伊津井芳子、阿見順子

〈註〉

1. 八木英三郎「下野国河内郡長岡の古墳」（『東京人類学会雑誌』155号・1899）
2. 雷電山古墳（北山古墳群）、戸祭大塚山古墳、山本山2号墳などにも長岡石使用の同手法の石室がみられる。
3. 山ノ井清人「栃木県における切石使用横穴式石室の編年」（『栃木県考古学会誌』第6集 1981）
4. 大金宣亮「各地域における最後の前方後円墳・栃木県」（『古代学研究』第106号 1984）
5. 山ノ井清人「古墳時代」（『宇都宮市史』第1巻 原始古代 1979）

〈参考文献〉

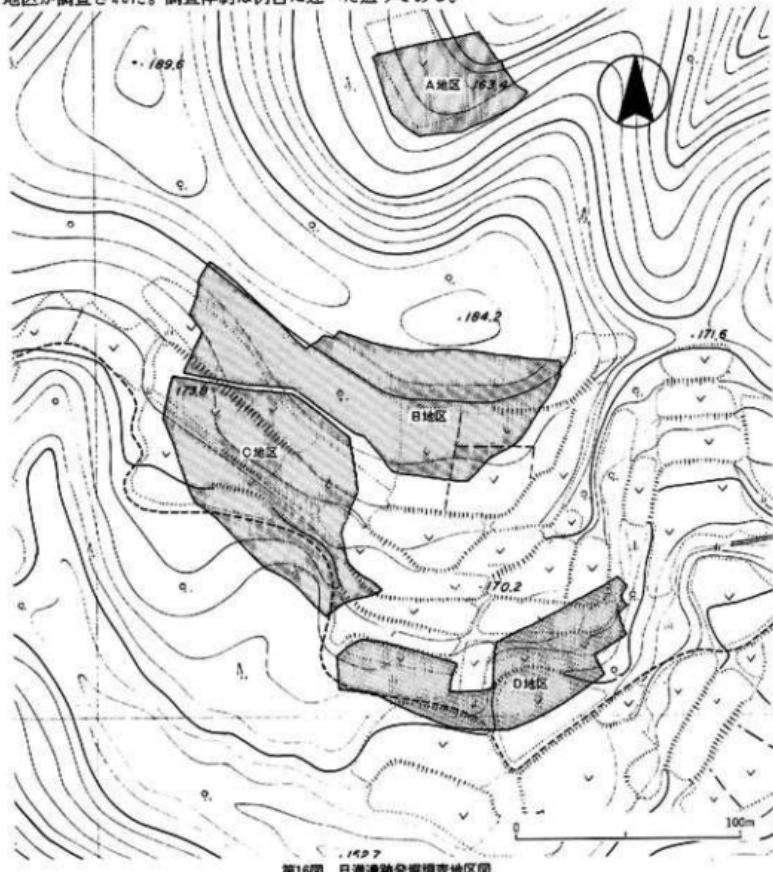
木村光男・梁木誠「針ヶ谷新田古墳群」（宇都宮市埋蔵文化財調査報告第11集、1984）

[大金宣亮]

III 日満遺跡

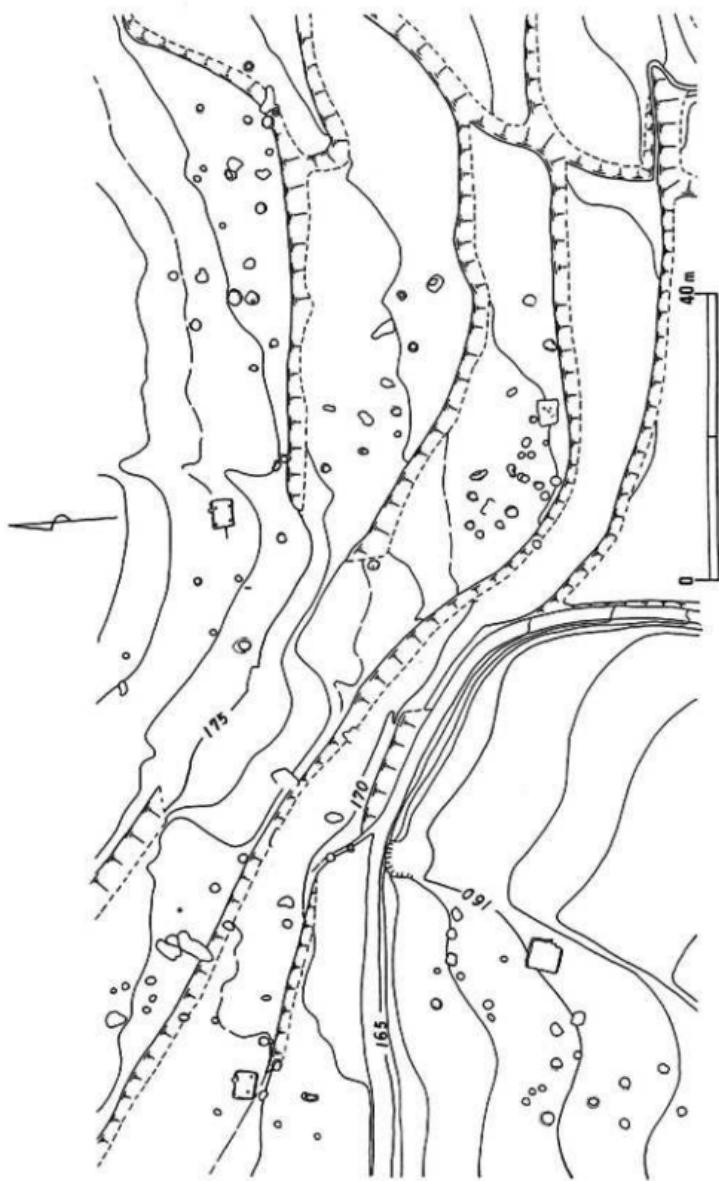
1 はじめに

本遺跡は、宇都宮市瓦谷町字日満に所在するところから字名を遺跡名とした。昭和52年以来、所有権者の㈱大林不動産によって分譲地化の計画が進められたが、120haに及ぶ一帯は、土器片、石器等の遺物散在が認められるところで、昭和55年に発掘調査が実施されることになった。遺跡地帯をA～Dの4地区に分け、同年3月26日～4月5日にA、D地区が、7月10日～9月6日にB、C地区が調査された。調査体制は例言に述べた通りである。



第16図 日満遺跡発掘調査地区図

第17圖 日高瀬的遺跡分布図



2 日満遺跡の概要

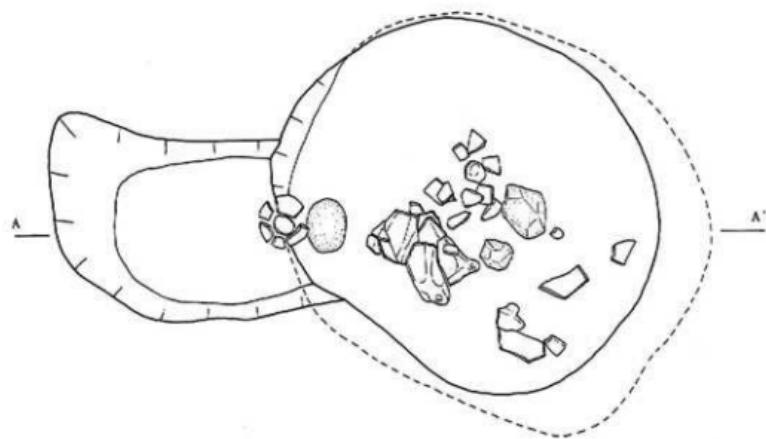
遺跡地は宇都宮市街地の北方約5kmに所在する。徳次郎北東部の羽黒山を含む山地から南へ延びる宇都宮丘陵の中央部、田川による開析谷の南側に位置する。宇都宮丘陵は南方に従って低くなる傾向を示し、なだらかな起伏がみられるが、下横倉から瓦谷を結んだ北西-南東方向に流れる田川によって南、北に分断されている。遺跡地は、田川に面する北側傾斜面がA地区、丘陵頂を越えて南側斜面にB-D地区が設定された。南端のD地区下方に湧水地点がみられ、東流して田川に合流する。この開析谷をはさんだ南方の丘陵一帯はすでに長岡ニュータウンとして宅地造成が済んでいる。宇都宮丘陵とその北に続く羽黒山麓台地上は、草創期-晩期の各期の遺跡が所在し、後・晩期の墓跡的な遺跡をもつ特殊遺跡も知られている。大谷寺洞穴(宇都宮)梨木平遺跡(上河内)、古宿遺跡(上河内)などが代表的なものである。

標高は164-173m。北側の田川河床からの比高は19-29m、南側の湧水地点からの比高は14mを側る。B-D地区は山林・畑地が広がり展望はよいが、急傾斜面である。傾斜面の上段がB地区、下方へC、Dとした。B地区的地層は、黒色腐植土(層厚25cm)今市軽石粒混入黒褐色土(約10cm)、今市軽石層(約15cm)、今市軽石粒混入褐色ロームと下部へ続き、遺構は今市軽石粒混入黒褐色土上部で確認されている。B地区的下方では黒色腐植土(約100cm)、片岡スコリア微粒及び今市軽石粒混入褐色ローム(約120cm)、乳白色に風化の進んだ鹿沼軽石層(約20cm)、黄色ロームへと続く様相が確認できる。

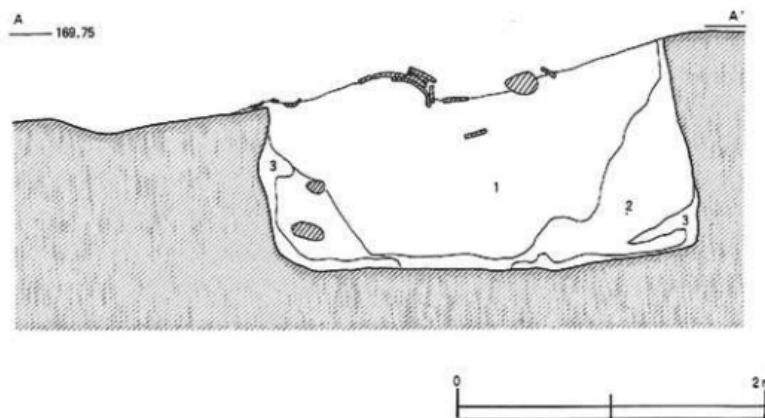
宇都宮丘陵の基盤(凝灰岩層)上に局所的に見られる高位段丘疊層を層序として把握できないが、標高149.26mの高所に位置する南側湧水地点が疊層にあたるとと思われる。B地区的地層からは、丘陵頂付近から南側傾斜面への土壤流出がかなり激しく、斜面下方で流出度合は増し、軽石粒が腐植土、ローム中に各々混在する。勾配の急な斜面に土壤が集中することは、日満遺跡の特質を考える上で見逃せないことであろう。

3 調査結果

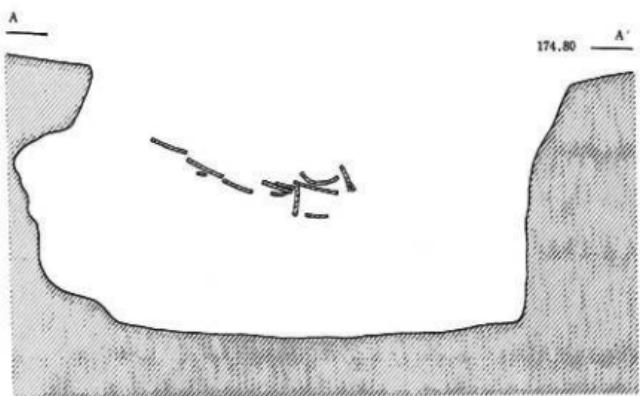
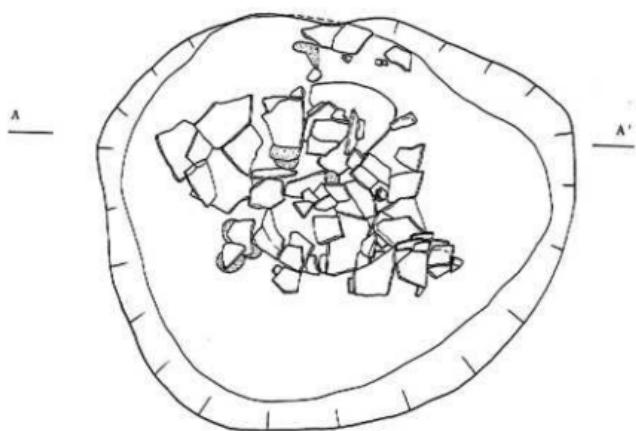
B-C地区で検出された遺構は、土壙115基、住居址5軒である。土壙は内部に土器、石器、石塊等の遺物を有するものと、無遺物のものとがある。遺物中、土器片によって使用時期あるいは最終使用段階を想定できるのは68基である。土壤形態は様々で、口径より底径が大きい数値を示す袋状、ほぼ同数値の円筒状、底径が小さい鉢状等、断面形による分類の他、口径部が不整形、底部が明確でない例も多くみられる。B地区西方に位置するP-64は袋状土壙で、南北に緩傾斜を示す突端部に位置する。今市軽石粒の混入する黒褐色腐植土層中に開口し、口径は南北124cm、東西121cm、底径は同じ方向で140cm・126cmを側り、ほぼ円形を呈する(第18図参照)。深さ60-80cm、底部は平坦で、ロームブロック混入褐色土が底部周辺及び壁面に薄く密着している。袋状に広がった部分は今市軽石粒とロームが混入する黒褐色土が充填し、石塊1個が南側壁面近くに出土する。土器片は開口部と、土壙中央上半部の今市軽石粒・ローム粒混入褐色土中から出土している。土器の出土



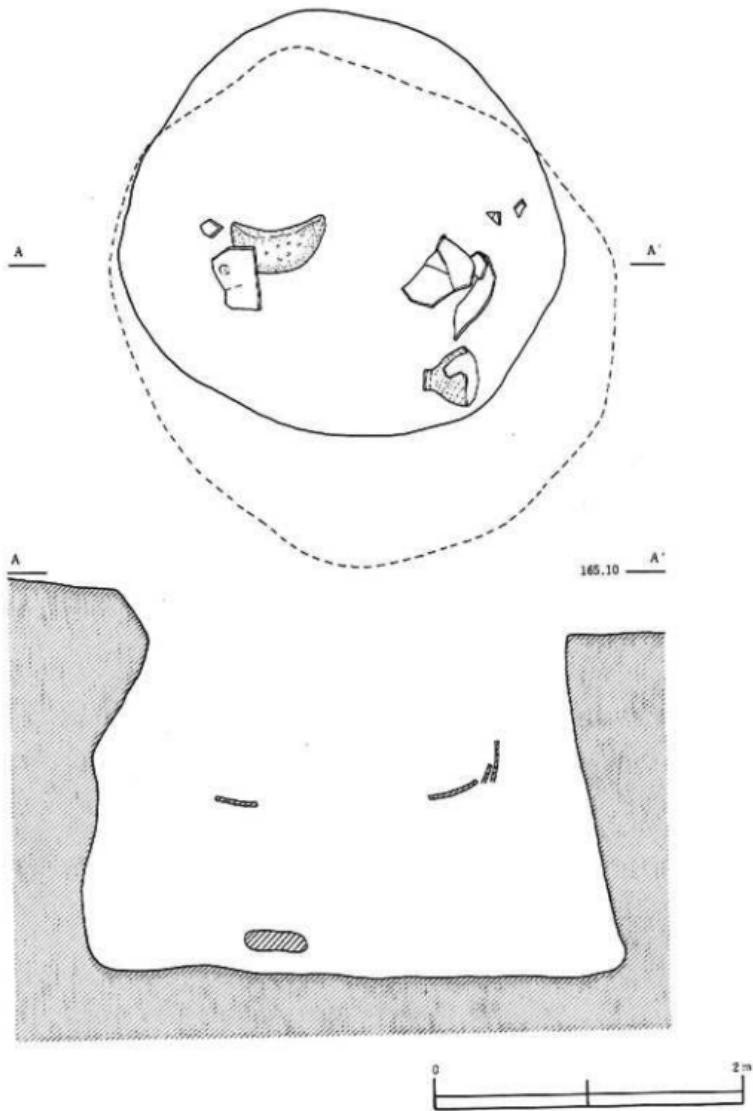
1. 黒褐色土（ローム粒混入）
2. 黒褐色土（今市ローム混入）
3. 棕色土（ロームブロック混入）



第18図 B区P-64土壤実測図



第19圖 B區P-10土壤實測圖



第20図 CKP-205土壤実測図

状態や土壤内充填土の堆積状態からみて、袋状土壤を構築した当初は土器を伴う使用状況とは言えない。土壤使用中または使用後に土壤外の土壤が流土として自然堆積し袋状形態が損われ、その後の使用過程に土器が位置付けられるものであろう。当遺跡地の袋状土壤における土器出土状態では同様の例がいくつある。B地区東方の上部緩傾斜面に開口するP-10は、西・北側壁面が膨ら味を持つ変形袋状土壤である。口径135cm、底径125cm、深さ85cm、平坦な底部であるが、土器は膨ら味のある部位より上半に密集している(第19図)。また、C区中央に位置するP-205では、平坦な底部に石皿が出土し、土器は壁面が広がりを持ちはじめる位置より上に出土する(第20図)。遺物が出土しない袋状土壤例もあわせて、構築当初の機能や土器を伴う段階の土壤使用状況、そして円筒状・鉢状不整形の土壤との比較が検討されねばならない。検出された住居址はいずれも土師器を伴うもので、土壤群は居住場所と別個に選定された可能性が強い。土壤が互いに重複せず点在すること、造構を伴わない土器出土地点があること等も遺跡、造構の特質を抽出する過程で検討してみたい。

土壤内出土の縄文土器は、中期後半の加曾利EI~IV式に位置付けられる。破片のみの出土が多いが、土壤の使用最終段階を考慮し、遺跡内の土壤配置を時期毎のあり方にせばめてみる必要はある。日本考古学協会昭和56年度大会シンポジウムによる縄文中期10段階区分によればⅦ~Ⅹ期にあたる、区分概要を以下に示せば、

Ⅶ期

滑らかなキャリパー状深鉢が確立し、渦巻文を伴う口縁部横帯文・体部懸垂文をもつ土器が新たに出現し主体となる。県南では口縁外反で素文とした異系土器(曾利式系)がこれに伴出。県北では新たに大木8b式の供給があり伴出が見られる。大木8b式は、頭部がくびれる壺形や肩が張る壺形で体部に渦文モチーフの横位展開文をもつ一群と、キャリパー状深鉢で貼紐の波状文を口縁部文様とする一群がある。他に上半外反の深鉢でカスガイ様の区画文をもつ土器が伴う。

Ⅷ期

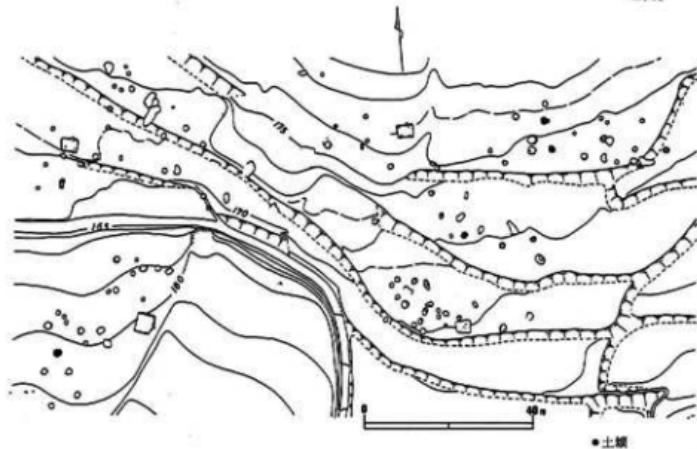
口縁部横帯文に沈線文が多用され、磨消縄文手法が普遍化し体部懸垂帶が特徴的となる。前段階の大木8b式の2タイプは継続して存在し、新たに異系土器の連弧文が伴出する。造構の存り方を見ると(芳賀町上の原)、Ⅶ期とⅧ期とは連続的で時間的に近接している。該期は鉢部貫孔の有孔鉢付土器が伴出する。

Ⅸ期

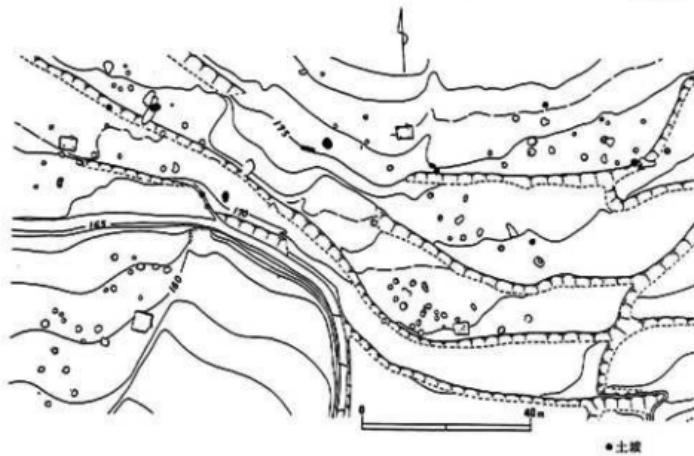
口縁部横帯文が孤立して円・梢円文となり、体部懸垂帶と対置する一群を前半、口縁部と体部文様とが一体化して縦位配列される一群を後半とする。前半の土器は横帯文にワラビ手状曲線を絡むなどヴァリエーションが見られるが、遺跡・資料点数とも少なく細目は不詳・共伴事例はないが頭部がくびれた大型壺で条線文地文を特徴とする異系土器(曾利式系)が出現し伴うものと見られる。

後半の土器は梢円文を上下に対置するものやH字状磨消帯を縦列するものなどと、縦位の舌状区画帯の中に梢円文を描き込むもの(背負い梢円文)とがあり、この二群には先後関係があろう。これ

VII期

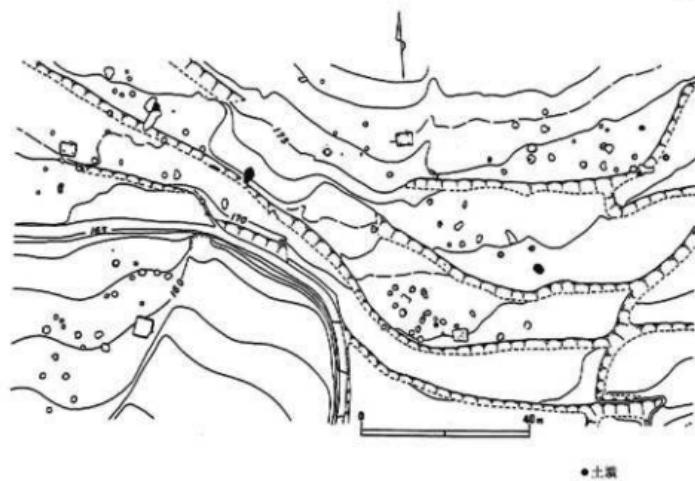


VII期



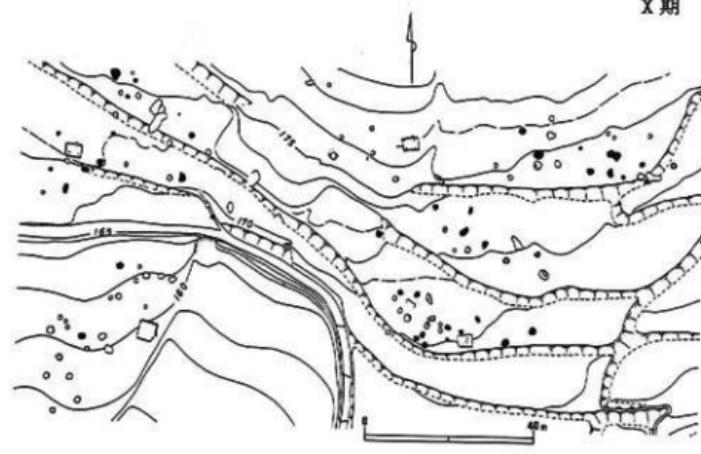
第21図 日満遺跡時期別遺構分布図(1)

IX期



●土壤

X期



●土壤

第22回 日満遺跡時期別遺構分布図(2)

らには貼紐で器面全体に渦巻文モチーフの横位展開文を施す土器が伴う。これらの土器は大木9式の新しい部分に対比され、県北地域はその圏内にとりこまれているものと思われる。県北にあってはⅣ期は複式炉が盛行し大木文化圏に属する。

X期

口縁部素文帯と器面の一体化した文様が特徴。文様区画に微隆起線が多用され幅広の磨消帯により陰陽を対照的に表出す。橋状把手も該期の特徴的モチーフ。新たに両耳壺が出現する。遺跡数が減少し、土器は単体出土(埋甕造構など)が多いので、伴出に基づく組成については不明部分が多い。大木式の急速な退潮により関東一円的な土器が共通的に見られる。

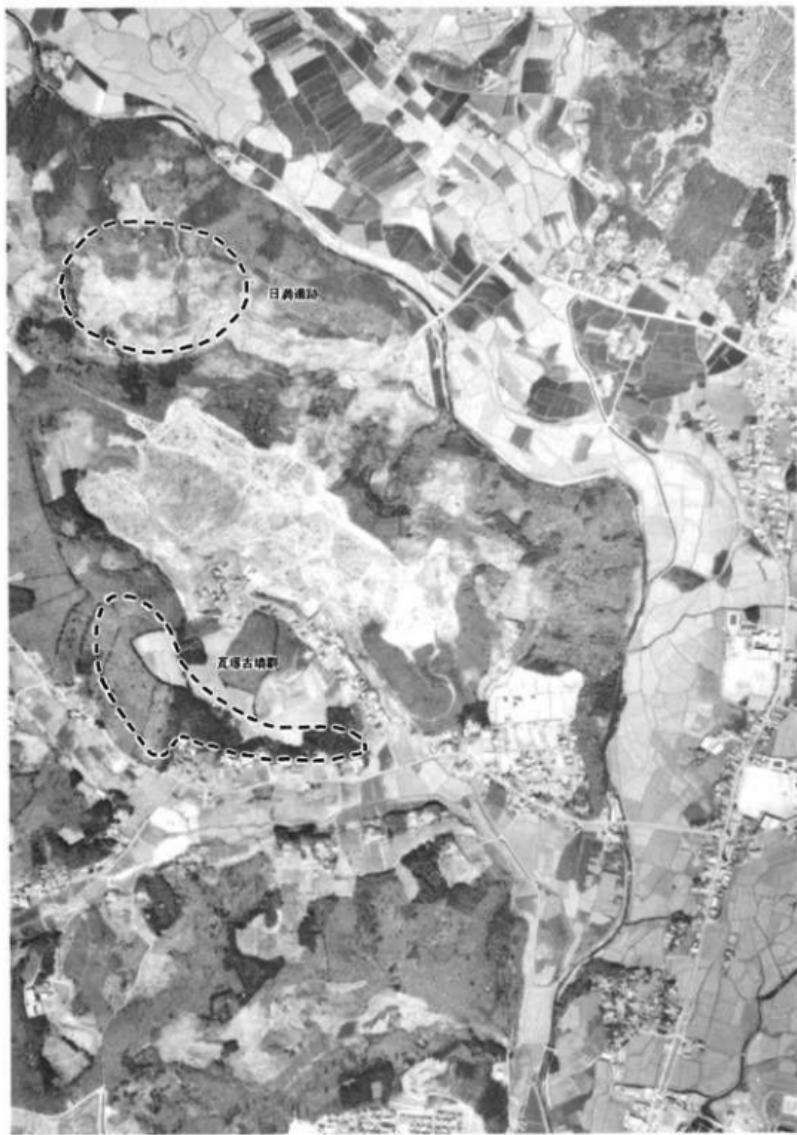
また、これらの区分にもとづく土壙数は、Ⅳ期6基、Ⅴ期11基、Ⅵ期8基、Ⅶ期43基となる。土壙配置(第21・22図)をみると、Ⅳ期～Ⅵ期には調査区全域に疎に存在し、Ⅵ期～Ⅶ期には斜面の場所を特定せず区域内に点在する。遺物の出土しないものや小破片のため時期決定できないものも同数近くあるから、縄文中期後半における土壙配置の側面として把えて整理していきたい。

4 おわりに

調査概要及び今後の課題をまとめると次のようになる。

- (1) 遺跡は、丘陵頂から南側の急斜面に位置し、斜面下14mの湧水地点から延びる開析谷に面している。
- (2) B・C地区における造構は、土壙115基、住居址5軒の他、造構を伴わない土器単独出土例もある。
- (3) 土壙形態は多種多様であるが、互いに重複するものはほとんどなく点在する。
- (4) 遺跡地における傾斜面の土壙流出は激しく、袋状土壙内が流土によって充填され断面形態は早い時期に変化していると思われる。
- (5) 土壙内出土土器は縄文中期後半に位置付けられ、更に4期に細分できる。
- (6) 4期のいずれの時期についても住居群は検出されず、この地域が土壙構築場所として特定された可能性をもつ。
- (7) 遺跡内土壙配置や土壙内土器出土状況を更に整理を加え、4期の時期細分を側面として土壙機能を抽出していきたい。〔星代方子〕

IV 図 版





PL.2 瓦塚古墳群・日満遺跡所在地空撮（南から）



PL.3 瓦塚古墳群・日満遺跡所在地遠景（南から）



PL.4 瓦塚32号墳石室蓋石露出状況（東上から）



PL.5 同（南東から）



PL.6 瓦塚32号墳石室開口時（東上から）



PL.7 同（南東から）



PL.8 瓦塚32号石室（南東から）



PL.9 同玄室部（上から）



PL10 瓦塚32号墳石室壁の方（南西から）



PL11 同（南東から）



PL12 瓦砾32号填直刀出土状况



PL13 瓦砾32号填出土直刀



PL14 瓦塚25号墳調査状況（玄門方から）



PL15 同石室（奥壁方から）



PL16 瓦塚26号墳（北から）



PL17 瓦塚26号墳石室（玄門方から）



PL18 瓦塚26号墳石室蓋石（玄門方から）



PL19 同石室



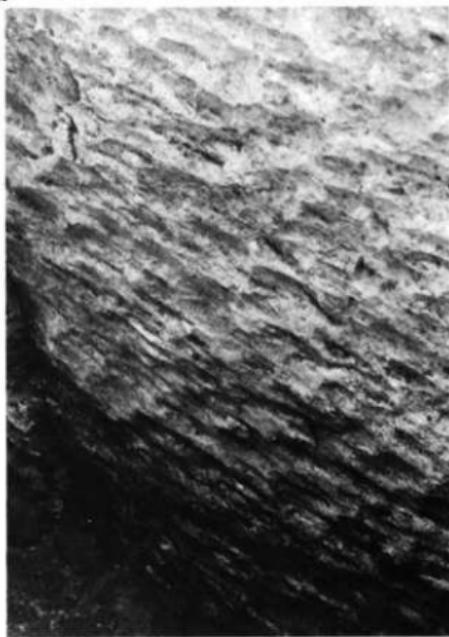
PL20 26号墳石室奥壁付近（上から）



PL21 同中央部（上から）



PL22 瓦罐26号墙侧壁外侧横土状况



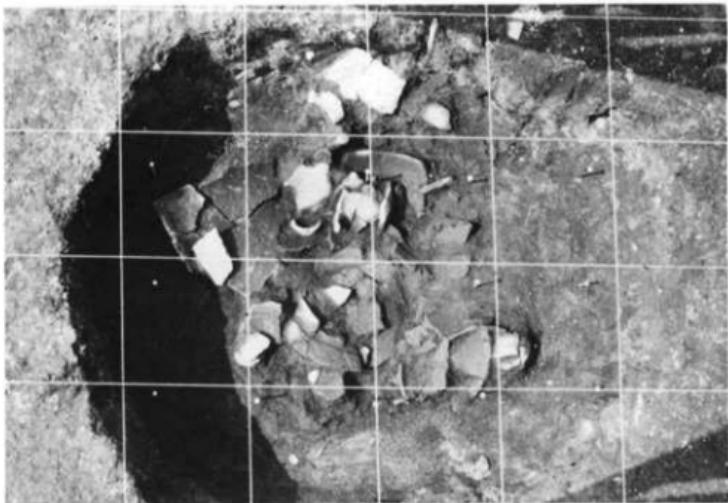
PL23 瓦罐26号墙侧石内面工具痕



PL24 日満道路跡（南から）



PL25 日満道路跡B区東部（西から）



PL26 日没遺跡10号土壤上層（上から）



PL27 同中層（上から）

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第19集

瓦塚古墳群・日満遺跡

(長岡ニュータウン建設に伴う
埋蔵文化財調査報告)

発行 宇都宮市教育委員会

(宇都宮市中央1-1-13)

TEL (0286) 37-2111

印刷 梶松井ビ・チ・オ印刷

(宇都宮市平出町4287-7)

TEL (0286) 62-2511

昭和60年3月31日